

K-521

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第24集

竹籬

竹籬C遺跡第Ⅰ次発掘調査報告書

1988

米沢市教育委員会

世纪工業株式会社

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第24集

ザ
笊 篬 C 遺 跡

第 I 次発掘調査報告書

昭和 63 年 4 月

米沢市教育委員会

世紀工業株式会社

序 文

笊籬 c 遺跡は、米沢市の東部、福島県境に近い梓川上流域に所在します。

ここには、すでに「米沢市遺跡地図」では、笊籬 a ~ e 遺跡の 5 遺跡が確認されておりますが、今回地権者である世紀工業株式会社の厚生施設建設（野球場）計画が本市に示され、緊急発掘調査を実施することとなり、それをまとめたものが本報告書であります。

調査の結果、調査区の東半分が縄文前期初め頃の、西側半分が同時期の末期遺跡であることが判明いたしました。

この時期の遺跡としては、隣接の高畠町「押出遺跡」が著名ですが、本遺跡も当時の住居跡 8 棟が確認されるなど古代人の生活を知る上で重要な手がかりを与えてくれるものと思います。

最後になりましたが、この遺跡の発掘に関しては、世紀工業株式会社の絶大なるご理解とご協力を賜わりましたことに、心より厚く御礼申し上げます。

昭和 63 年 6 月 30 日

米沢市教育委員会

教育長 小 口 亘

発刊によせて

世紀工業株式会社

取締役社長 堤 菁

考古学は不思議な世界だ。男はなぜあんなに地面を掘ることに熱中できるのか、ということを考えるには女はなぜ地面を掘ることに男ほど熱中しないのか、ということと対にして考えてみたい。いまわたしの目の前に小屋原出土の2センチメートルそこそこの石の矢じりの写真がある。男はそこに5300年前に生きていた人間の生命があったことを感じて、いわば生命というものに間接的に5300年ぶりに始めて触れたという感激の一瞬があって、つまり、男が生命に触れうるのはいつもこんなふうに間接的なのではなかろうか。だから間接的という部分に知的部分がはいってくる。それが学問の体系をとっていくものようだ。

穴を掘ることに夢中になれる哺乳動物はいっぱいいる。しかしもちろんモグラは考古学者になりえない。モグラの鼻先に地中でこの矢じりにぶつかっても、5300年前に生きていた人間の存在がそこにかつてあって、そのDNAの流れが今とまるで切れずにいるというような生命観に感動することはない。女性はDNAという遺伝情報を対にして細胞分裂を自分の体内で保護しながらくり返えさせ3000グラムほどの大気中で生存できる最小単位の生命体として産み出す。つまり女性の生命観はいつも直接的なのだ。男のように間接的にまどろっこしいことをしている必要はない。そんな男の代表のような手塚孝さんに掘っていただきて、そのまま多くの社員に見せてもらって生命の切れ目のない流れを感得させていただけたことに深い感謝の意を表します。

例　　言

- I 本報告書は、世紀工業株式会社の野球場造成に伴う緊急発掘調査報告書である。
- II 発掘調査は米沢市教育委員会が主体となって、世紀工業株式会社と協議のうえ、昭和62年8月20日～9月16日までの約1ヶ月にわたり実施したものである。
- III 調査体制は下記の通りである。
- 調査主体 米沢市教育委員会
調査総括 安部敏夫（社会教育課長）
調査担当 手塚 孝
調査員 菊地政信 金子正廣
調査補助員 原 三郎
作業員 鶴貫六助 蔵田清二 我妻徳枝 斎藤憲一 佐藤秀司 会田仁一郎
東谷金七 梅津孝一 小山敏浩 石沢淳一 宮戸則昭
事務局 平間重光 梅津幸保 山田 隆 我妻重義 角屋由美子
調査協力 世紀工業株式会社
- IV 挿図の縮尺は、土器は2分の1、石器は原寸とし、図版も同様とした。遺構についてはスケールを示しているので不同とした。なお石器の実測図の中で「—」は使用痕、「○」は磨滅を表わす。
- V 本書の作成は、手塚 孝がその任務にあたり、石器については菊地政信が担当した。その他金子正廣と小林理香が編集に協力し、責任校正は梅津幸保、山田隆が担当した。

本文目次

(題字は米沢市教育長 小口 亘による)

序文

例言

目次

I 遺跡の概要.....	1
II 調査の経過.....	3
III 検出された遺構.....	3
(1) 竪穴住居跡.....	3
(2) 土壙.....	15
(3) 小ピット.....	15
IV 検出された遺物.....	20
(1) 出土土器.....	20
(2) 出土石器.....	25
V まとめ.....	39
(1) 集落構成.....	39
(2) 風倒木坑.....	41
1) 風倒木の規定.....	41
2) 風倒木坑の層序.....	47

挿図目次

第1図 箕籠C遺跡群周辺の地形図.....	2
第2図 箕籠C遺跡遺構全体図.....	5
第3図 箕籠C遺跡HY1平面図.....	7
第4図 箕籠C遺跡HY4平面図.....	8
第5図 箕籠C遺跡HY5平面図.....	9
第6図 箕籠C遺跡HY6平面図.....	10
第7図 箕籠C遺跡HY8, HY19, XY17平面図.....	11
第8図 箕籠C遺跡HY45平面図.....	12
第9図 箕籠C遺跡HY46平面図.....	13
第10図 箕籠C遺跡土壙平面図.....	16
第11図 箕籠C遺跡小ピット平面図.....	17
第12図 箕籠C遺跡土壙, 風倒木坑平面図.....	18
第13図 箕籠C遺跡出土土器拓影図(1).....	21
第14図 箕籠C遺跡出土土器拓影図(2).....	22
第15図 箕籠C遺跡出土土器拓影図(3).....	23

第16図	笊籠C遺跡出土土器、石器実測図(1).....	30
第17図	笊籠C遺跡出土石器実測図(2).....	31
第18図	笊籠C遺跡出土石器実測図(3).....	32
第19図	笊籠C遺跡出土石器実測図(4).....	33
第20図	笊籠C遺跡出土石器実測図(5).....	34
第21図	笊籠C遺跡出土石器実測図(6).....	35
第22図	笊籠C遺跡出土石器実測図(7).....	36
第23図	笊籠C遺跡出土石器実測図(8).....	37
第24図	笊籠C遺跡出土礫器実測図.....	38
第25図	地方文化圏概念図.....	40
第26図	風倒木坑概念図.....	42
第27図	風倒木坑堆積順位想定図(1).....	43
第28図	風倒木坑堆積順位想定図(2).....	44
第29図	風倒木坑堆積順位想定図(3).....	45
第30図	米沢市内出土の風倒木坑.....	46

付 表 目 次

第1表	笊籠C遺跡出土遺構計測表.....	19
第2表	笊籠C遺跡出土石器計測表.....	27
第3表	笊籠C遺跡出土石器形態分類表.....	28

図 版 目 次

第一図版	笊籠C遺跡の発掘(1)
第二図版	笊籠C遺跡の発掘(2)
第三図版	笊籠C遺跡の発掘(3)
第四図版	笊籠C遺跡の発掘(4)
第五図版	笊籠C遺跡の発掘(5)
第六図版	笊籠C遺跡出土の土器(1)
第七図版	笊籠C遺跡出土の土器(2)
第八図版	笊籠C遺跡出土の石器(1)
第九図版	笊籠C遺跡出土の石器(2)
第十図版	笊籠C遺跡出土の石器(3)
第十一図版	笊籠C遺跡出土の石器(4)
第十二図版	笊籠C遺跡出土の石器(5)
第十三図版	笊籠C遺跡出土の石器(6)
第十四図版	笊籠C遺跡出土の石器(7)

I 遺跡の概要

本遺跡は米沢市万世町梓山字小屋原5519他に所在する。標高1067mの駒ヶ岳に源を発する梓川によって形成された河岸段丘上に立地し、米沢市遺跡地図では梓川流域の遺跡群「a グループ」に分類されている。

梓川の流域一帯を生活面とする遺跡群は米沢市内の遺跡総数の約半数を占める180箇所が分布しており、これらを上流から梓川上流流域の遺跡群、八幡原周辺の遺跡群、戸塚山周辺の遺跡群の三遺跡群に区別して呼んでいる。笊籬 c 遺跡の存在する梓川上流流域一帯は、最上流に位置するNo394の菅 a、No89の菅 b 両遺跡を筆頭にNo90の笊籬 a、No91の笊籬 b、No92の笊籬 c、No93の笊籬 d、No94の笊籬 e 遺跡の7遺跡群と下流に下って梓川扇状地の扇頂部に集中するNo259の李代遺跡、No277の法将寺遺跡等を含めた11遺跡の計18遺跡で構成しており、前者を仮に笊籬周辺、後者を李代周辺の遺跡と細別すれば、笊籬周辺の遺跡群は笊籬 e 遺跡と笊籬 a 遺跡が縄文中期の遺跡で他は全て縄文前期を主体にする一方、李代遺跡周辺の遺跡群は縄文早期～同晩期、弥生と広範囲に及んでいる。

次の八幡原周辺の遺跡群は、梓川扇状地の扇央部から同扇状地末端部にかけての標高360m～375mの広範囲に沿って50遺跡が分布している。

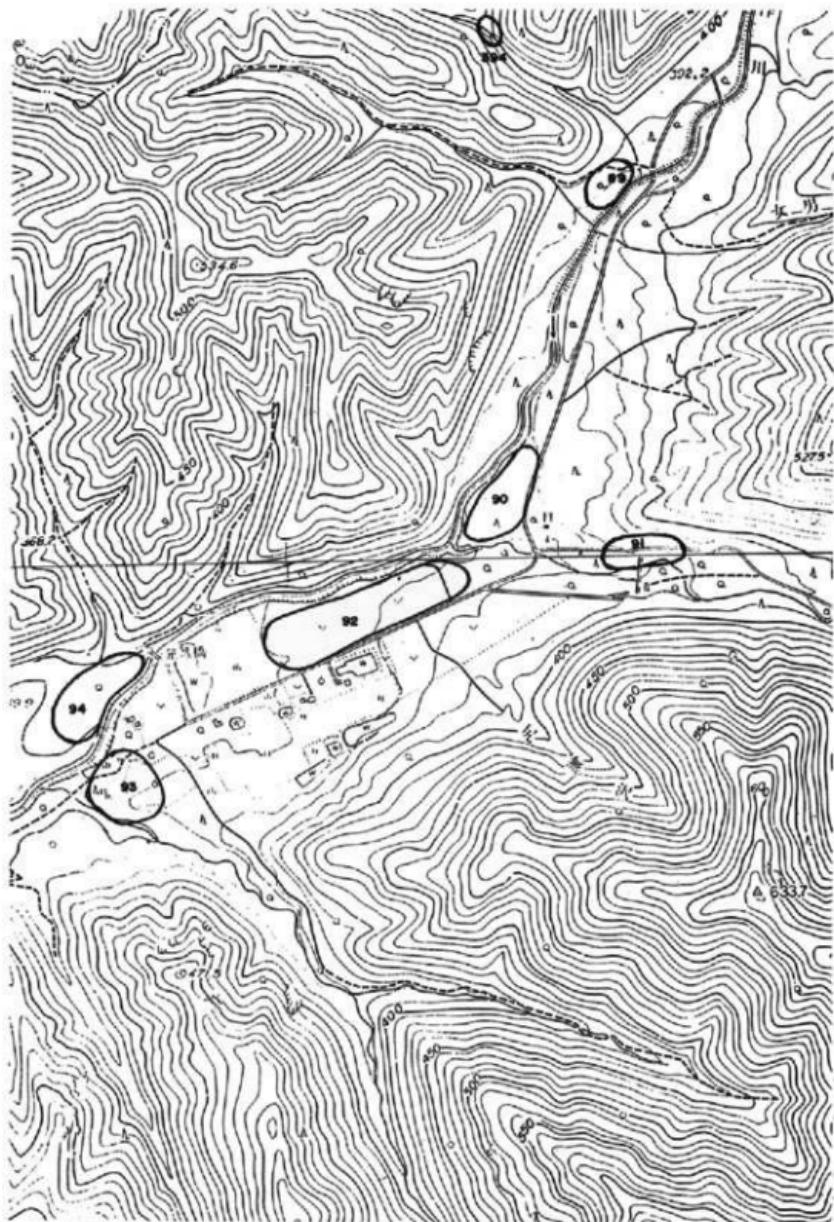
同遺跡群は米沢最古の縄文創草期から縄文時代の各時期、弥生時代、古墳時代、奈良時代から平安、中世そして現代と長期に亘って遺跡が認められる。

ことに、県内最古の撫糸文を伴出した竪穴住居跡、方形周溝墓が認められた大清水、八幡堂、比丘尼平等の三遺跡は、県内外においても注目されている遺跡である。

最後の戸塚山周辺の遺跡群は梓川扇状地の最末端に位置するもので、松川扇状地、羽黒川扇状地、高畠の屋代川扇状地等に複合、合流する一帯に分布する遺跡群であり、東北屈指の戸塚山古墳群を中心として周辺に60遺跡が密集している。本遺跡群の特徴は、戸塚山古墳群と密接に係わりを有する時期のものが大半を占め、後の平安期から中世期が主流をなし、縄文時代に属する遺跡は数遺跡しか認められない。

以上が梓川流域に分布する遺跡群のあらましであるが同じ扇状地でも西側に位置する羽黒川、松川、鬼面川、三扇状地内の遺跡分布をみると、羽黒川は縄文前期、松川は縄文中期、鬼面川は縄文晩期と、西に行くに従って最初に登場する遺跡の年代が新しくなる特質を有する。このことは、扇状地形成の発達が東から西に移行していたことを物語るとともに、扇状地形成後の安定度もまた、西に行くに従って遅れたものと理解されよう。

梓川流域の遺跡群も全体的に分類すれば、扇状地形成後に最初に集落跡を構成するのは八幡原周辺であり、その後半永久的に継続する。このことは扇状地形成の速度が極めて早く成立したとともに、形成後の河川の影響（洪水）も少なかったことを示すものであろうし、八幡原周辺の遺



第1図 犬籠遺跡群周辺の地形図

上が真北 縮尺1万分の1

跡の大半が大複合遺跡が多いことも裏付けられる。

一方、梓川上流流域の遺跡群、特に笊籠周辺は全て単純遺跡となっており、しかも前期、中期に限定されることは、一時的な移動によって形成された集落の可能性を示唆する。

戸塚山周辺は稻作文化の発達以降、後期古墳文化から律令時代の確立の中で政治経済を開拓した拠点と言える。

さて笊籠C遺跡であるが、梓川左岸を利用した東南300m×南北100mの細長い遺跡で、試掘調査の結果、東側半分は縄文前期初頭の遺跡であり、西側半分は同じ前期でも末葉の遺跡で占められていることが判明し、今回調査を実施した範囲はこの中の西側にあたる。

II 調査の経過

笊籠C遺跡の西側を中心に野球場の造成が実施されるという情報を得た為、米沢市教育委員会では開発側の世紀工業株式会社と事前に協議を行ない、当地一帯の試掘調査とボーリング探査を行なった。

調査は、西側を中心に遺跡の範囲と造構の密集地を把握することを前提に行なった結果、遺跡西側の中心部を1600m²と推測し、他の箇所は調査外ということで工事を進めても問題がないと判断した。

発掘調査は、調査範囲と設定した1600m²を中心に工事と並行する形で行ない、重機による表土剥離、面整理と進め、造構・遺物の集中する範囲に沿って8m×8m単位の基本グリットを設定し、造構の存在を確認する中でグリットを拡張する方法をとった。

8月20日から表土剥離を開始、8月23日から面整理と並行して8月26日に終了、8月27日からは精査、同造構確認を行ない、9月1日から造構の掘り下げに入る。9月9日からは写真撮影、平面図作成、セクション図作成等の最終工程に入り、9月16日をもって全て終了する。

最終的な精査面積は580m²と比較的小規模面積ではあったが、縄文前期末葉の竪穴住居跡8棟を含む56基の造構を検出するに至った。

III 検出された造構

今回の笊籠C遺跡から検出された造構は全て縄文前期末葉期に属するものであり、竪穴住居跡8棟、土壙11基、風倒木坑5基、小ピット29基を含めた56基が認められている。ここでは代表的な造構を主に説明を加えたい。

(1) 竪穴住居跡[第3図～第9図]

平面的な形状から基本的に橢円形プランを示すものと円形プランを示す2通りがある。但し、住居跡内の柱穴の配置状況からすれば時代差を示すものではない。大きさはHY19の約5mを最大

に平均3.5~4mを中心として、壁下に柱穴を配するのを特徴としている。また、住居跡の切り合い状況と住居跡内の堆積土層、確認面からの吟味からHY 4, HY 5, HY 18, HY 45の4棟は新しく、HY 1, HY 6, HY 19, HY 46は古いと考えられる。更にHY 4, HY 5, HY 18の3住居跡にはXY 3, XY 2, XY 17の風倒木坑が示す様に大木を接して住居跡が存在していることも判った。

HY 1〔第3図〕

不整楕円形プランを示す住居跡でG 13~15-10・11より検出された。長径3.4m短径3.02mを有する住居跡内には、壁下にP 38~P 51の14基が不規則に配してあり、大きさは9~15cm、深さ10~25cmをなしている。

壁はなだらかに立ち上がり、南で11cm、北で9cm、東で7cm、西で6cmと浅く、全体的に南東から北西に若干傾斜している。床面は平坦で、中央部に僅かな炭化粒が点在していた。炉は認められなかった。

遺物は磨滅した土器片2点と小剝片2点、磨石1点の5点が検出されている。

HY 4〔第4図〕

G 14~16-14・15の範囲にかけて認められたもので、長径3.38m、短径3.05mの楕円形プランを呈する竪穴住居跡である。住居跡の南側一端はXY 2の風倒木坑によって破壊されているがほぼ現状を保っており、50~120cmの間隔で柱穴がP 28~P 34の8本が認められた。柱穴はP 31が住居内部に存在する他は壁直下に配してあり、幅は約15cm、深さ20cm位と平均的であった。壁は東と西が15cm、他は12cm位である。炉は存在しない。

遺物は第21図141のb'類の剝片石器1点と土器底部破片第15図96の1点、それに小剝片石器3点の計5点が認められている。

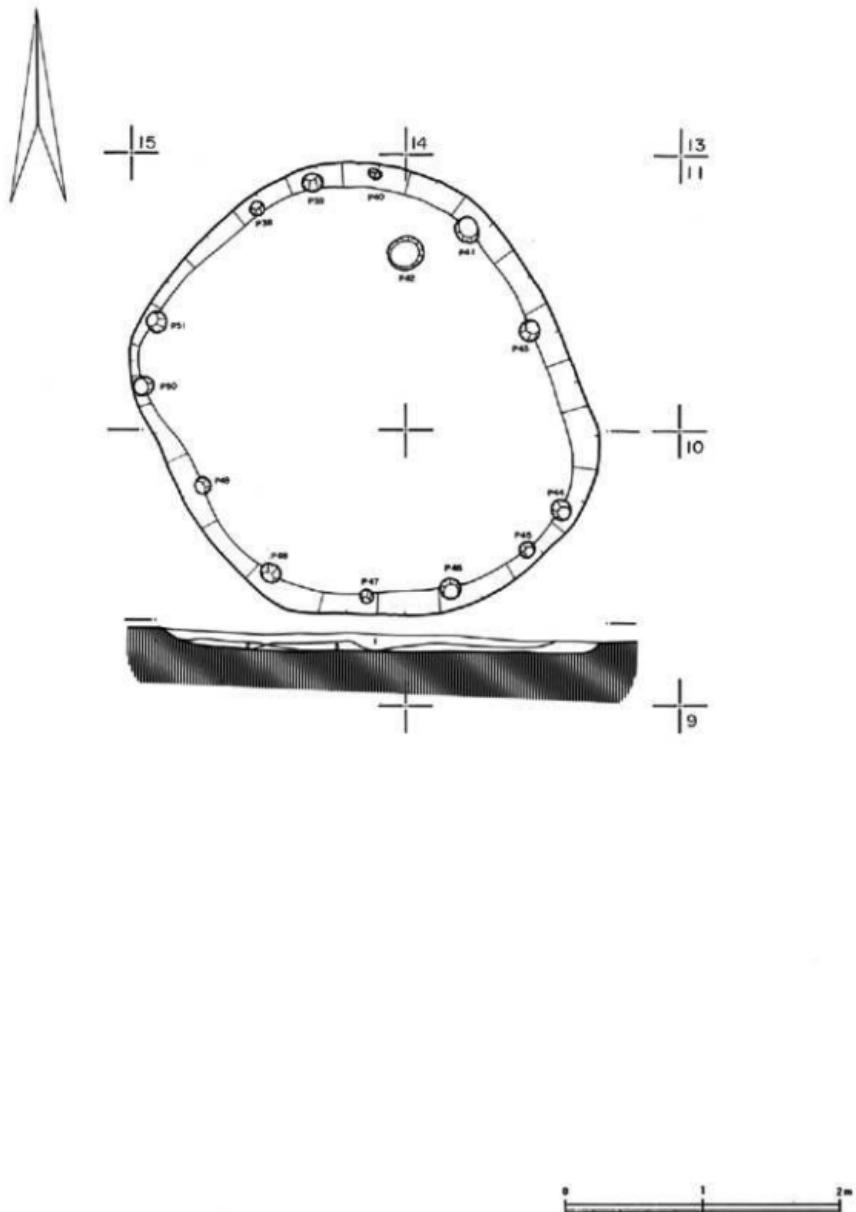
HY 5〔第5図〕

住居跡の西側の一部がXY 3によって切られているが、ほぼ楕円形プランを示す長径4m、短径3.14mの竪穴住居跡である。壁は斜位に立ち上がり、西側が12cm、東側が16cm、南側が14cm、北側が15cmを有し、柱穴は6~12cm、深さ10~19cmの小さな柱穴を20cm~40cmの等間隔で密に配するのを特徴としている。炉は認められなかったが、住居跡の中央東寄りに30×40cm位の範囲に僅かな焼けた痕跡と木炭粒が点在する箇所が確認された。だが炉としての機能を有するものではないと判断した。

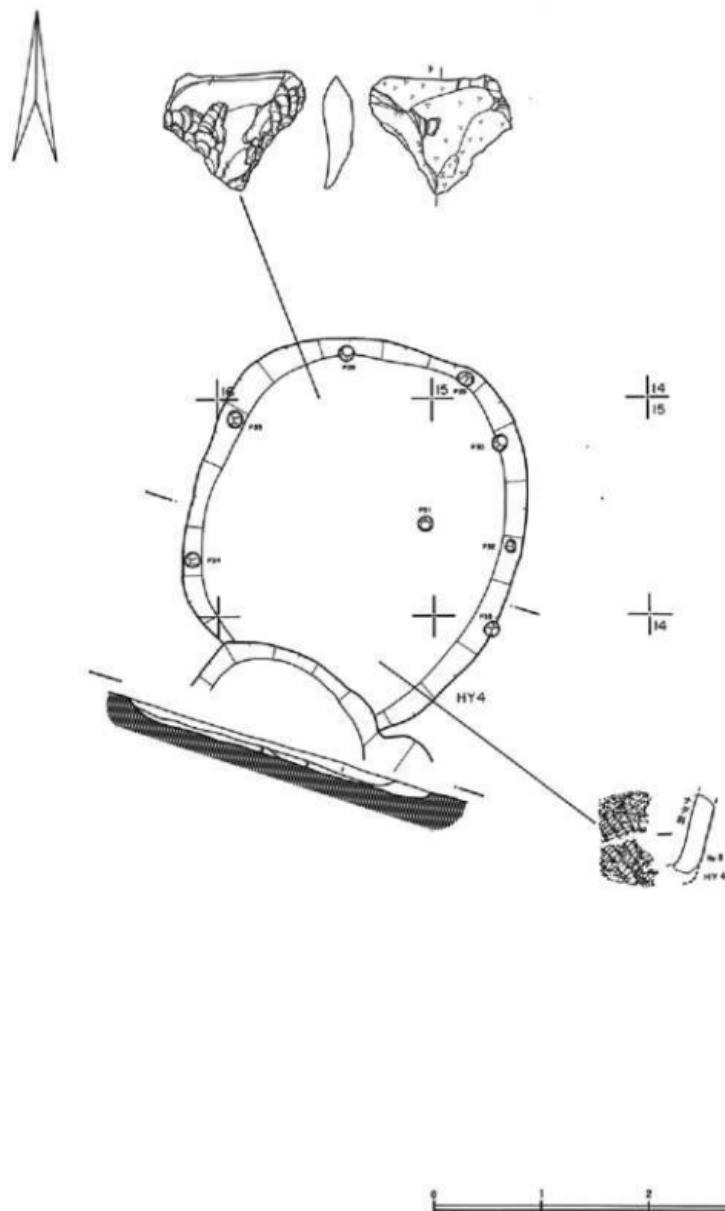
遺物は第13図11、第14図60の土器片の他に磨滅した土器片2点とチップ等の剝片3点が床面より検出されている。

HY 6〔第6図〕

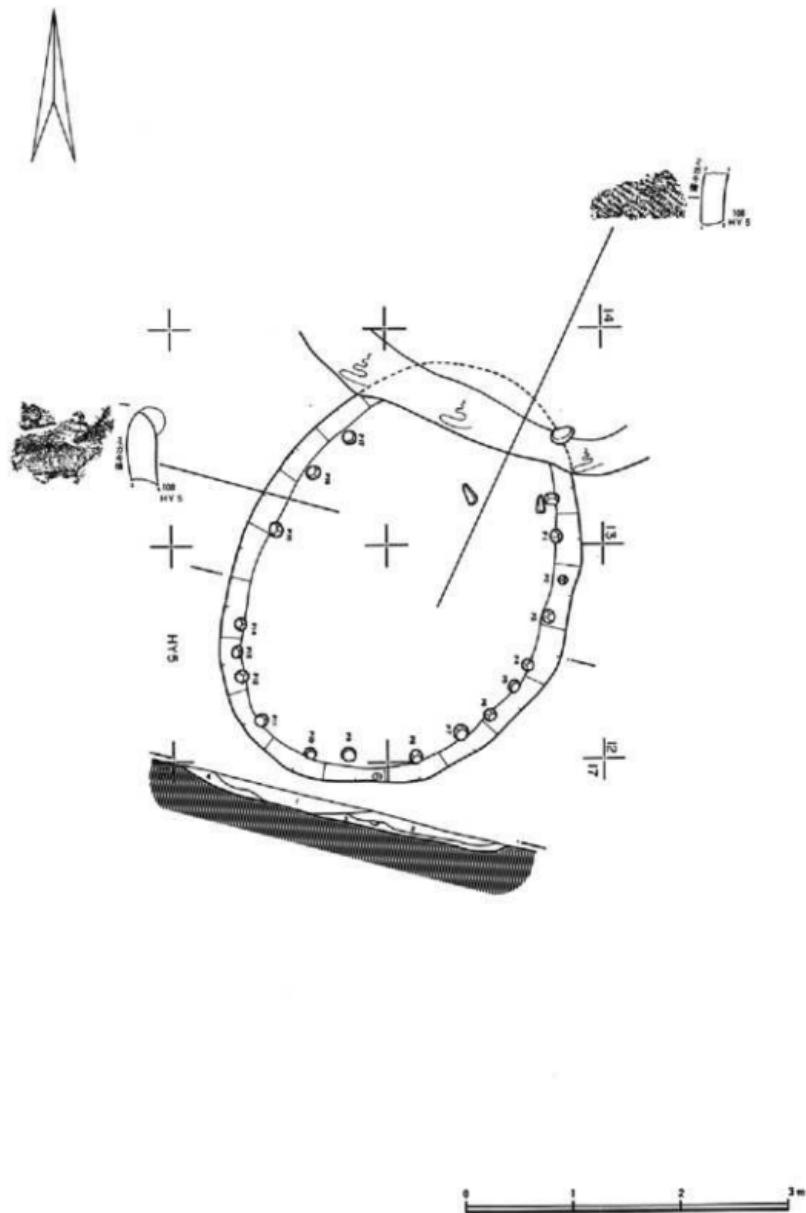
長径3.62m、短径3.01mを有するほぼ円形プランの住居跡であり、長径3.35mの楕円形プランを示す浅い落ち込みFY 22を切って構築している。壁はなだらかな斜状をなし、平均9cmを計り



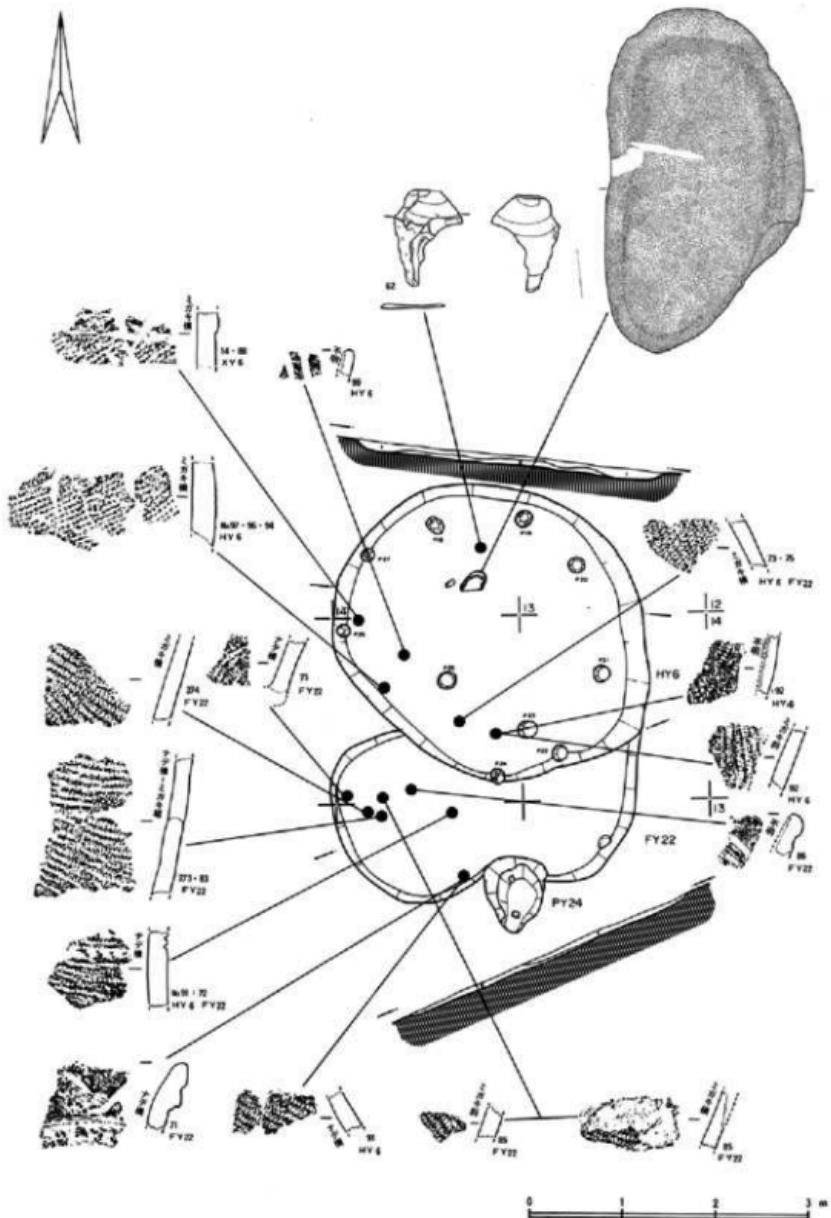
第3図 荒縄C遺跡HY 1平面図



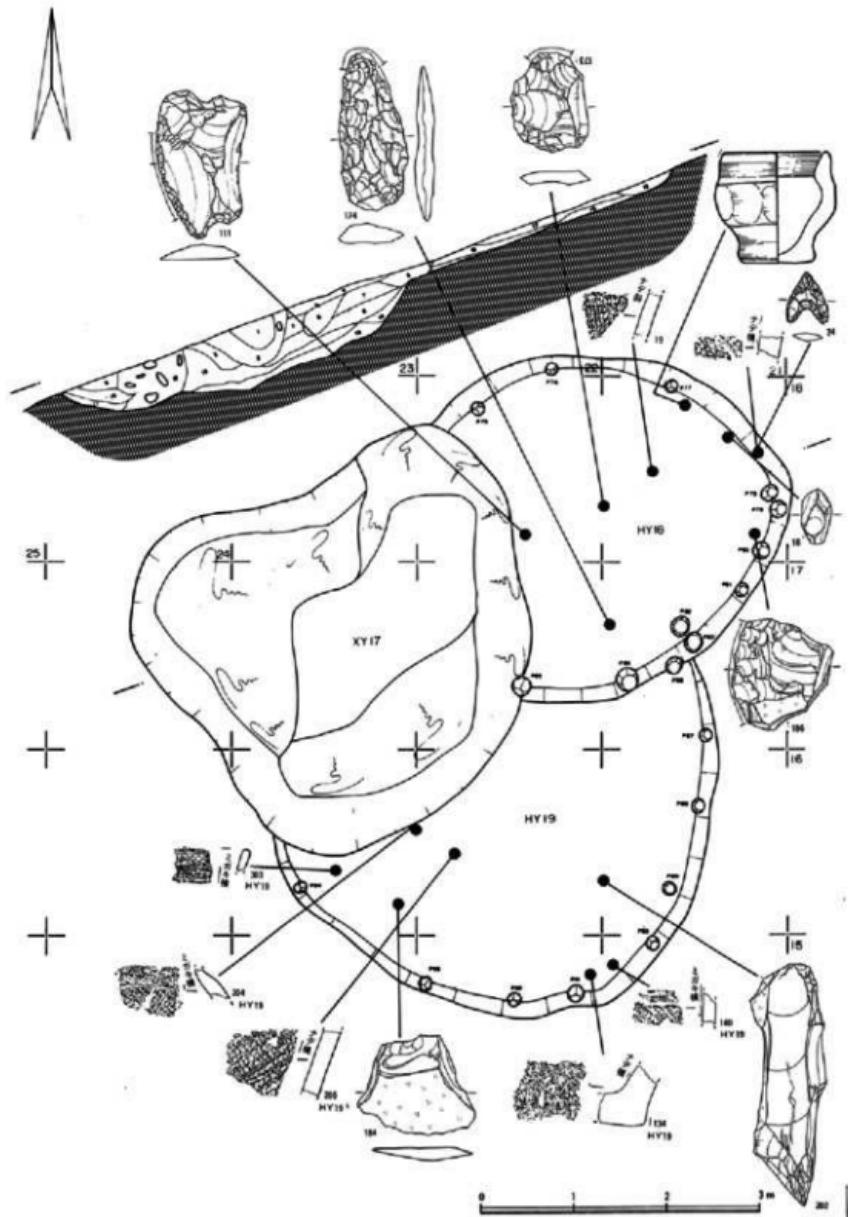
第4図 荒蘿C遺跡HY4平面図



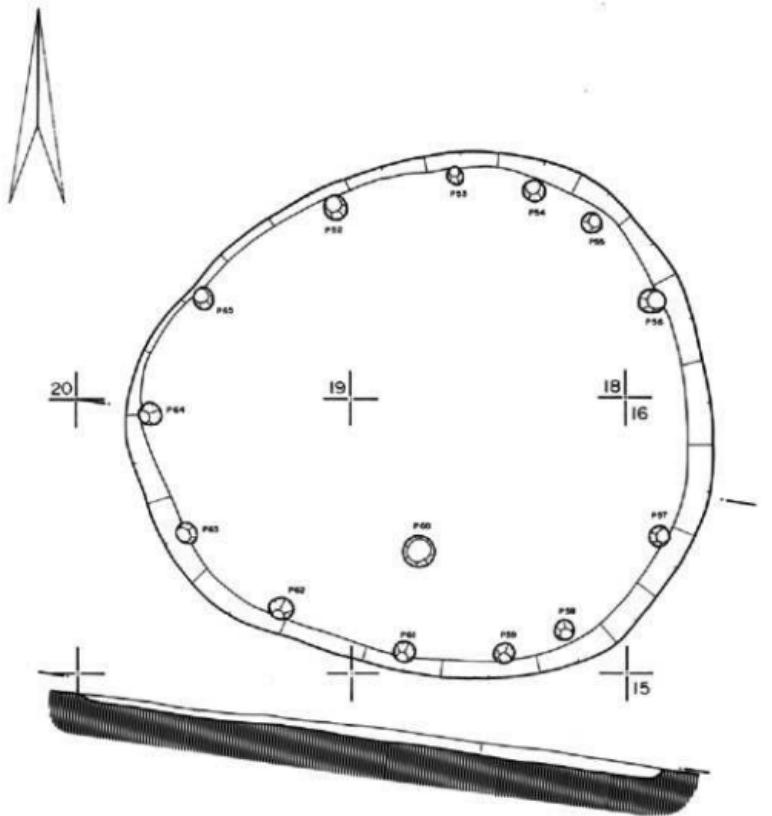
第5図 荒籠C遺跡HY 5平面図



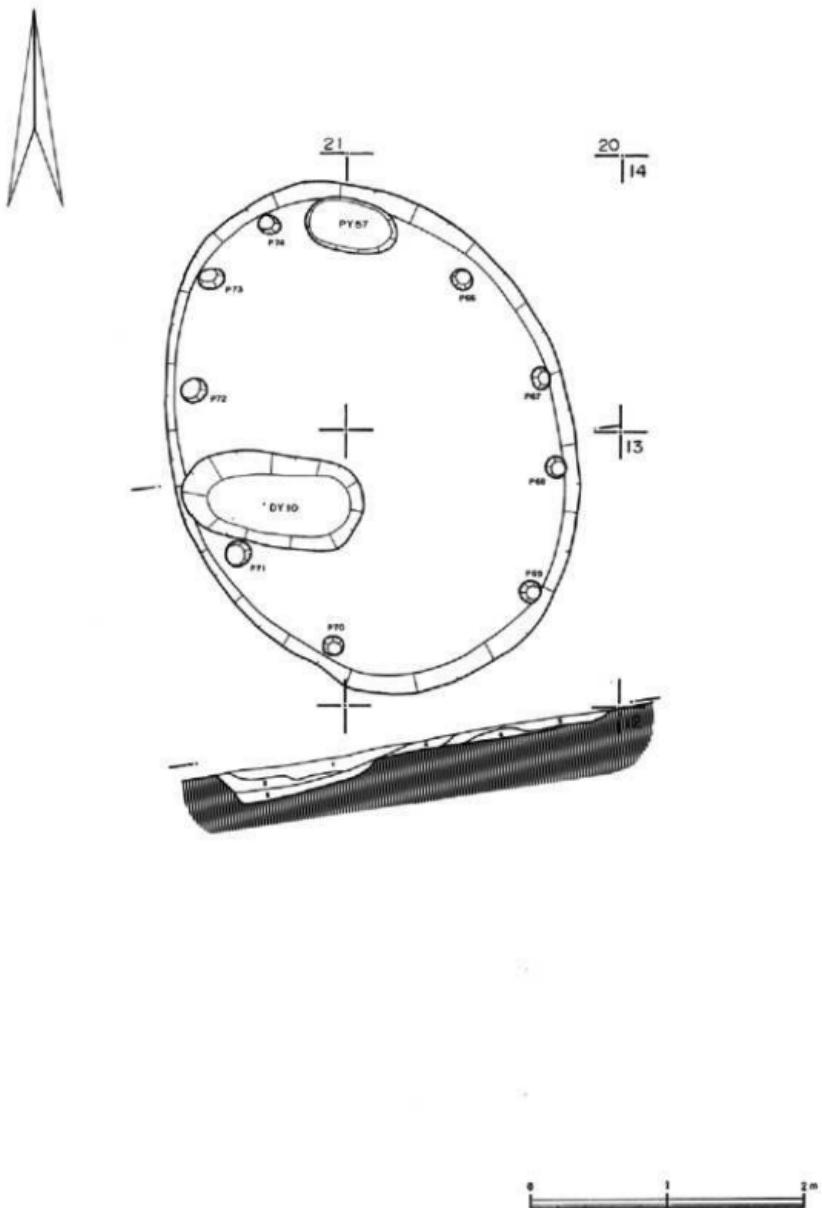
第6図 犬籠C遺跡HY6平面図



第7図 篠籠C遺跡HY18, HY19, XY17平面図



第8図 荒縄C遺跡HY45平面図



第9図 箕輪C遺跡HY46平面図

壁下に P 18～P 27の10本を柱穴として等間隔に配してある。炉は認められなかったが住居跡の中央部に焼土の一部と木炭粒が確認された。

遺物は、石皿 1点第24図162、土器片が第14図34・35・47・58・61、第15図75の他5点、剥片4点、第21図137の計16点が住居跡の中央部から西側にかけて検出されている。

HY 18・19[第7図]

G 22～25～15～18の調査区より検出された住居跡であり、XY 17の風倒木坑、HY 18、HY 19の三者が互いに切り合い関係を示している。切り合いの互合関係は、HY 18→HY 19、XY 17→HY 18となり、HY 19の廃絶後にHY 18を構築し、その後風倒木(XY 17)がHY 18を破壊したものと考えられる。

風倒木については後述することにし住居跡について述べれば、HY 19はほぼ円形プランを示す約5m位の大形竪穴住居跡、HY 18は楕円形プランを有する長径4m前後の住居跡と考えられ、柱穴は両者とも壁直下に配してあり、HY 18が若干不規則ではあるがP 75～P 81、P 85～86、HY 19がP 82、P 87～P 94とそれぞれが50～100cmの間隔で設置してある。全体的には、HY 18に属する柱穴がHY 19に比べやや大きく深いのが特徴である。

遺物は、HY 18が床面を中心には第16図101の小型完形土器1点を含む土器片11点、石鎌1点第16図103、石鉈状石器1点第16図105、スクレーパー3点第17図108・110・111、剥片5点の20点が認められている。HY 19は土器片を中心に18点の遺物が認められている。このうち図化を要したのは第13図10・20、第14図44・62、第15図97の土器片と、第18図118の6点である。

HY 45[第8図]

G 18～20～16・17より検出された不整円形プランを有する長径4.28m、短径3.83mの住居跡である。壁は全体に浅く平均8cmをなす。柱穴は壁直下にP 53～P 59、P 61～P 65の13本を配し、P 60のみが少し離れて存在する。柱穴の大きさは8～19cm、深さ15～26cm位が主で、40～70cmの間隔をもってめぐっている。

炉は存在しなく、住居跡の中央部北寄りに炭化物が集中する箇所がみられた。

遺物は、石器剥片2点のみである。

HY 46[第9図]

明瞭な楕円形プランを呈する竪穴住居跡であり長径3.79m、短径2.92m、深さ、北側で8cm、西側で7cm、東側で5cm、南側で6cmを計る。柱穴はP 66～P 74の9基を用い、長軸端の北側面と南側面間に広く開口し、東西側壁を主体に柱穴を配するのを特徴としている。また西壁面に接して長軸133cm、幅68cm、深さ25cmの土壤DY 10と、北壁に接する浅い不明落ち込みPY 57が認められているが、住居跡に伴うものは明確にできない。床面は、平坦で僅かに西側に傾斜している。遺物は、磨滅した土器片2点と剥片2点が床面より発見されたのみである。

(2) 土壌〔第10図、第12図〕

調査区全域にかけて11基の土壌が検出されている。土壌の多くは1m前後を有する円形プランの浅いボール状を有するものが大半であるが、DY 7を含む3基は所謂「袋状土壌」の形状を示していた。前者の浅い土壌は主にHY 18・19の両住居跡付近に点在するものが多く、埋土は1~3枚と少なく、遺物も殆ど検出されない。

後者の形状が袋状を示す土壌は調査区の東側に集中しており、前者の浅いボール状を呈する土壌群とは明らかに性格が異なるものと考えられる。DY 7は約1m、深さ73cm位の土壌であり、自然堆積状況を示す埋土が12枚確認された。DY 8・DY 48は、互いに切り合い関係を有しており、埋土の吟味からDY 8をDY 48が切って構築していることが判った。底面からは両者とも1つの小ピットが認められ、一見、落し穴的要素も見受けられるが30cm前後と浅く、他の使用法が考えられる。遺物は検出されなかった。

その他土壌したものに底面形状が不整なDY 20も存在するが、埋土の状況から推測すれば小型の風倒木坑の可能性が高い。

(3) 小ピット〔第10図~第12図〕

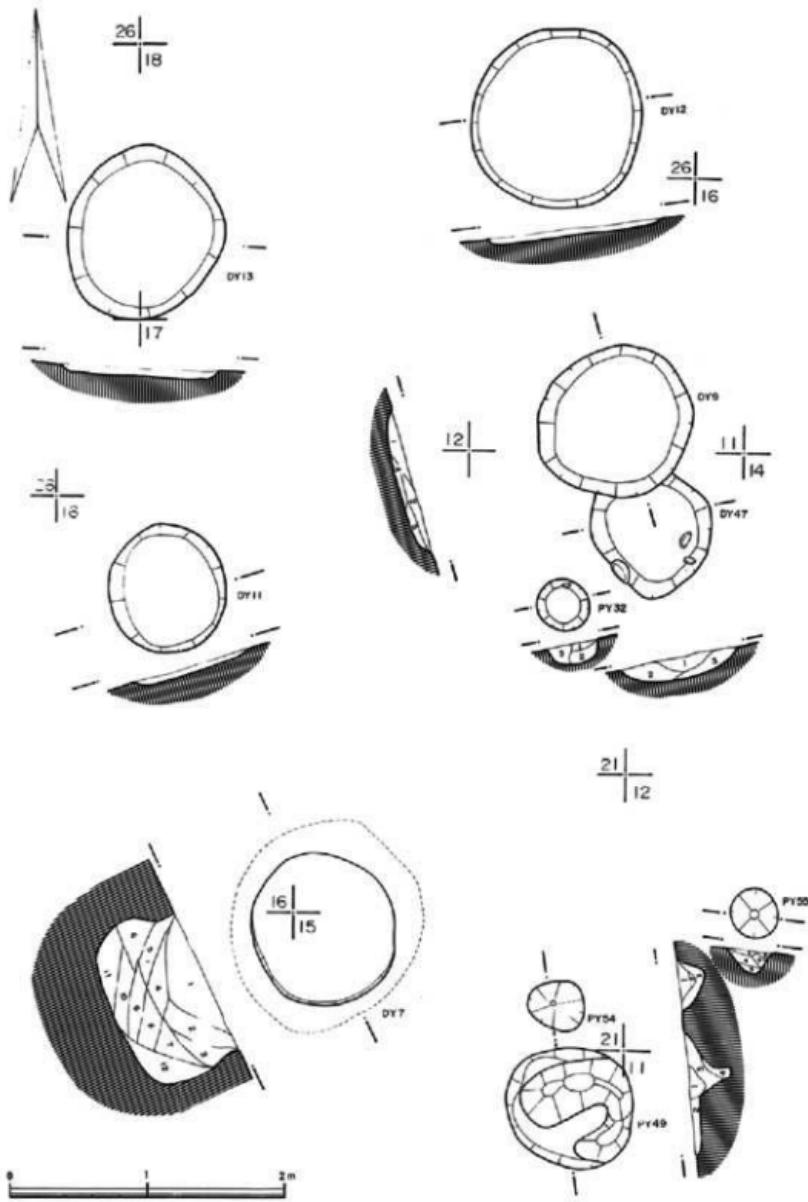
調査区全体から29基認められている。形状は円形若しくは不整椭円形を示すものが多く、5~15cm位の浅いものからPY 24の51cm、PY 49の39cm、PY 47の49cm、DY 25の25cm、PY 30の22cmの5基は別の性格を有するものとみられ、明らかにPY 24、PY 49、PY 47の様に柱穴（何らかの施設の一部）を呈するものもある。先の浅い小ピットの大半は、埋土の状態から想定すれば木根の可能性が強いものとみられる。

(4) 風倒木坑〔第7図・第12図〕

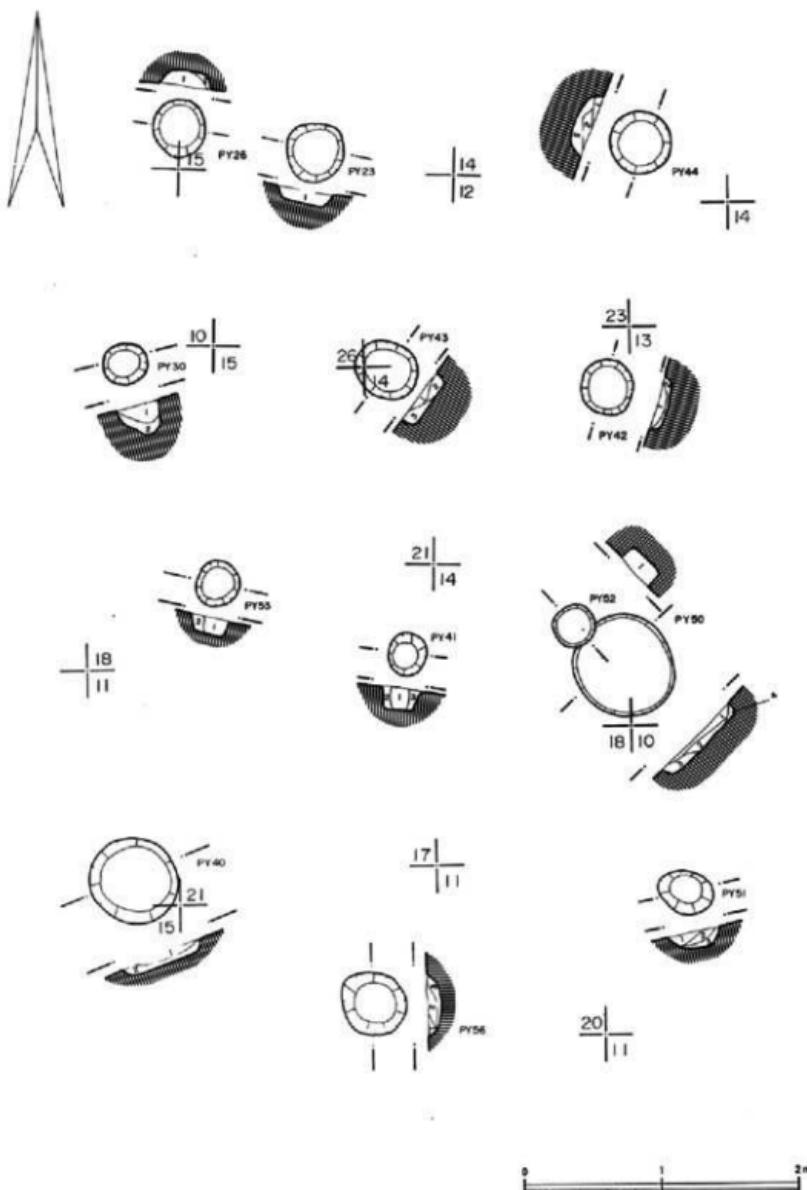
今回の調査で検出された風倒木坑は、先のDY 20を含め5基が認められている。主軸長がほぼ南北を呈する不整椭円形及び円形プランの造構であり、底面が著しく不整形を有しているのが特徴となる。

埋土はXY 17の15層を筆頭に、XY 3が11層、XY 2が7層、XY 15が9層、DY 20が6層となっており、風倒木坑特有の継位に走る層を中心を占め、更に地山層（黄褐色粘質土、明黄褐色砂利層）の堆積順位を吟味すれば、今回検出の全てが東寄りに集中していることから、立木の風倒方向は西、つまり東寄りの突風によって横倒したものと推測される。

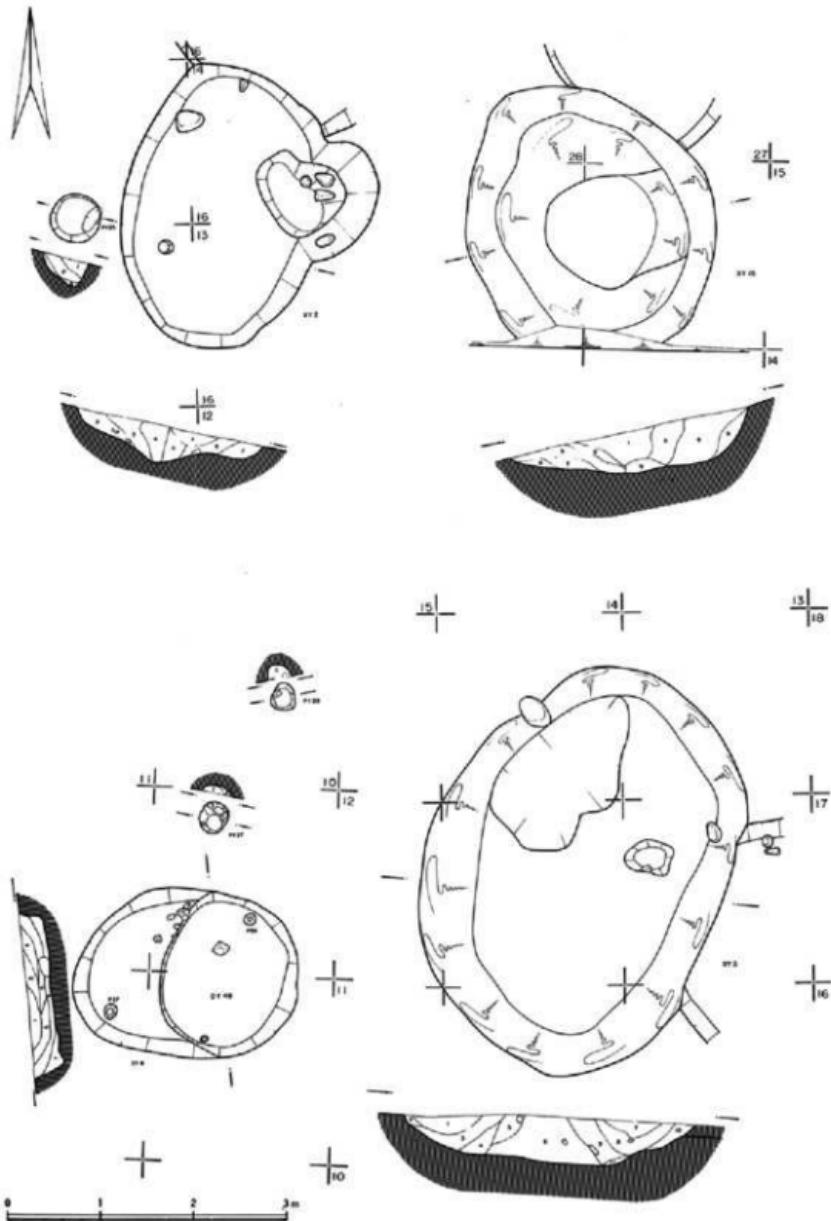
検出された遺物としては、XY 17が住居跡を切っていることもあって、土器片41点、チップ等の剥片48点の89点が埋土内より認められ、次いでXY 3より石鏃1点、スクレーパー1点を含む土器片8点、石器片16点の26点が出土している。なお詳しい各遺構の計測値に関しては、第1表に示しておいたので参照願いたい。



第10図 桐籠C遺跡土壤平面図



第11図 箕箆C遺跡小ピット平面図



第12図 江öz C遺跡土壤、倒木坑平面図

第1表 梶原C遺跡出土遺構計測表

遺構No	遺構名	出土地区	形 状	長径m	短径m	深さcm	出 土 遺 物	備 考
HY 1	堅穴住居跡	G 14・15・10・11	不整円形	3.40	3.02	10	土器片2点、剥片2点 磨石1点	
XY 2	風倒木坑	G 15・17・13・14	楕円形	3.09	2.26	36		
XY 3	風倒木坑	G 13・16・16・18	不整椭円形	4.50	3.45	38	土器片8点、剥片16点、石 礫1点、スクリーパー1点	
HY 4	堅穴住居跡	G 15・17・14・16	楕円形	3.38	3.05	14	土器片1点、剥片4点	
HY 5	堅穴住居跡	G 12・14・16・17	楕円形	(4.14)	3.14	15	土器片4点、剥片3点	
HY 6	堅穴住居跡	G 13・14・14・15	不整円形	3.62	3.01	9	土器片11点、剥片4点 石皿1点	
DY 7	袋状土壤	G 16・17・15・16	円形	1.12	1.03	73	土器片2点	
DY 8	土壤	G 11・12・11・12	楕円形	2.46	1.85	26		
DY 9	土壤	G 12・14・15	円形	1.13	1.06	10		
DY 10	土壤	G 21・22・13	楕円形	1.33	0.68	25		
DY 11	土壤	G 26・16	円形	0.93	0.85	5		
DY 12	土壤	G 27・16・17	円形	1.30	1.22	5		
DY 13	土壤	G 26・27・18	円形	1.20	1.12	6		
FY 14	不明遺構	G 28・29・16・17	不整円形	2.30	2.24	10		
XY 15	不明遺構	G 28・29・14・16	不整円形	3.0	2.55	57		
GY 16	地床炉	G 21・15	円形	1.05	1.0	3	剥片1点	
XY 17	風倒木坑	G 23・25・16・18	不整円形	4.30	3.67	61	土器片48点、剥片41点	
HY 18	堅穴住居跡	G 21・23・17・19	不整円形	?	3.66	15	土器片11点、剥片5点、石 礫1点、石施1点、小形土器1点	
HY 19	堅穴住居跡	G 22・24・15・17	不整円形	4.96	?	11	土器片9点、剥片9点	
DY 20	土壤	G 19・20・15・16						
DY 21	土壤	G 18・19・14・15	楕円形	1.21	1.04	7		
FY 22	不明遺構	G 13・14・13・14	不定形	3.35	?	8	土器片13点、剥片2点	
PY 23	小ピット	G 15・13	円形	0.42	0.41	6		
PY 24	小ピット	G 13・14・13	不定形	0.83	0.64	51		
PY 25	小ピット	G 17・13・14	円形	0.56	0.53	25		
PY 26	小ピット	G 15・16・13	円形	0.41	0.38	6		
PY 27	小ピット	G 11・12	楕円形	2.47	1.50	49		
PY 28	小ピット	G 11・13	不整円形	0.30	0.27	15		
PY 29	小ピット	G 11・14	不整円形	0.35	0.30	9		
PY 30	小ピット	G 11・15	円形	0.32	0.30	22		
DY 31	土壤	G 21・18	楕円形	0.89	0.78	7	土器片1点、剥片1点	
PY 32	小ピット	G 12・14	円形	0.37	0.37	7		
PY 33	小ピット	G 18・14	円形	0.37	0.36	10		
PY 34	小ピット	G 19・15	円形	0.45	0.43	7		
PY 35	小ピット	G 17・14・15	円形	0.47	0.45	11		
PY 36	小ピット	G 16・17・16	円形	0.63	0.55	12		
PY 37	小ピット	G 21・17	不整円形	0.61	0.55	11	土器片1点	

遺構No	遺構名	出土地区	形 状	長径m	短径m	深さcm	出土遺物	備 考
PY 38	小ピット	G 21-16	円 形	0.39	0.37	13		
PY 39	小ピット	G 21-16	不整円形	0.36	0.30	12		
PY 40	小ピット	G 22-15・16	円 形	0.65	0.62	11		
PY 41	小ピット	G 22-14	椭 圆 形	0.32	0.28	15		
PY 42	小ピット	G 24-13	円 形	0.39	0.37	7		
PY 43	小ピット	G 26・27-14・15	円 形	0.47	0.41	10		
PY 44	小ピット	G 25-15	円 形	0.46	0.43	13		
HY 45	堅穴住居跡	G 18-20-16・17	不整円形	4.28	3.83	8	刺片2点	
HY 46	堅穴住居跡	G 21・22-13・14	椭 圆 形	3.78	2.92	6	土器片2点。刺片2点	
DY 47	小ピット	G 12-14	不定長方形	0.49	0.35	20		
DY 48	土壙	G 11-11・12	椭 圆 形	1.82	1.82	33		
PY 49	不明遺構	G 22-11	円 形	0.93	0.87	39		
PY 50	土壙	G 18・19-11	円 形	0.74	0.71	10		
PY 51	小ピット	G 20-12	不整円形	0.41	0.32	12		
PY 52	小ピット	G 19-11	円 形	0.31	0.30	14		
PY 53	小ピット	G 18-12	円 形	0.33	0.31	15		
PY 54	小ピット	G 22-12	不整円形	0.42	0.36	25		
PY 55	小ピット	G 21-12	円 形	0.35	0.35	18		
PY 56	小ピット	G 18-11	円 形	0.50	0.46	9		
PY 57	小ピット	G 21・22-14	椭 圆 形	0.68	0.40	8		

IV 検出された遺物

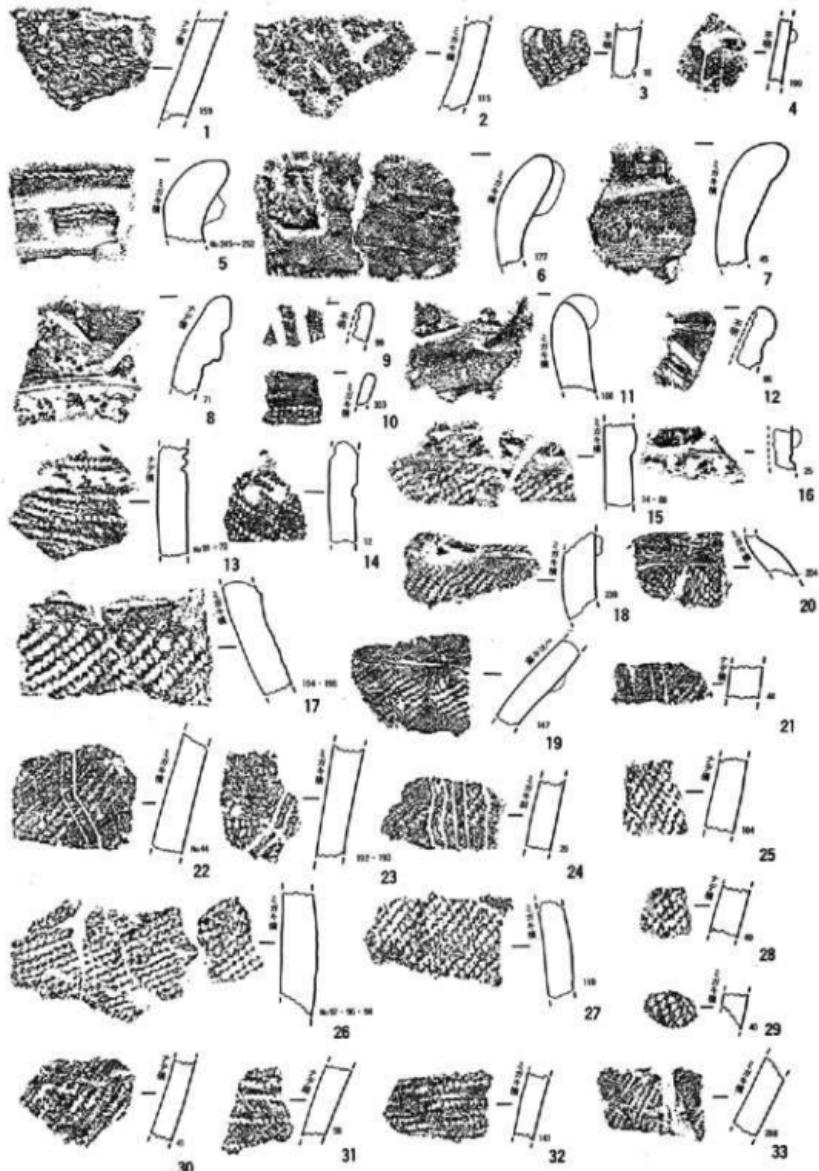
今回の調査で出土した遺物は、堅穴住居跡、風倒木坑等の遺構等を中心にして305点が認められており、このうち遺構内出土が185点、遺構外出土の遺物が120となる。これらの遺物は、縄文前期末葉期に属するものが大半を占め、僅かに同前期初頭に位置するものも含まれている。ここでは検出された遺物のうち拓影可能な100点の土器片と、図化した63点の石器について要約して述べることにしたい。

(1)出土土器〔第13図～第15図〕

遺構内出土114点、遺構外出土68点の計182点が認められた。土器片の大半は小破片によるものや磨滅を有するものが多く、明瞭な文様構成を示すものは残念ながら認められなかった。以下簡単に説明を加える。

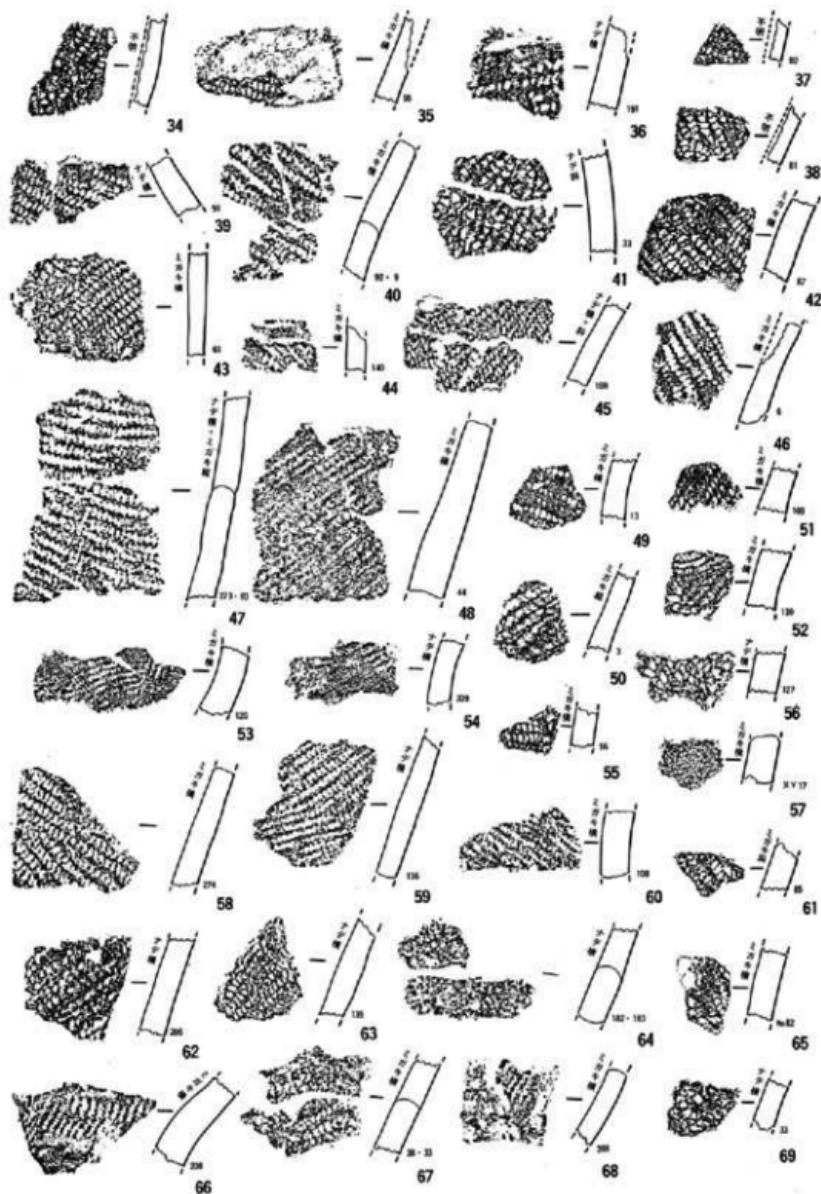
A群土器〔第13図1～4〕

HY 17埋土より2点、HY 18・DY 37から各1点の4点が認められた。4点とも磨滅が著しく胎土に多量の纖維質・石英砂を含み、焼性は悪い。1は弱いものの燃糸を斜位に転開したもの。2は地文となるRL内に棒状工具による沈線文を斜位に施したもの。3はLRの4本多条繩文片、

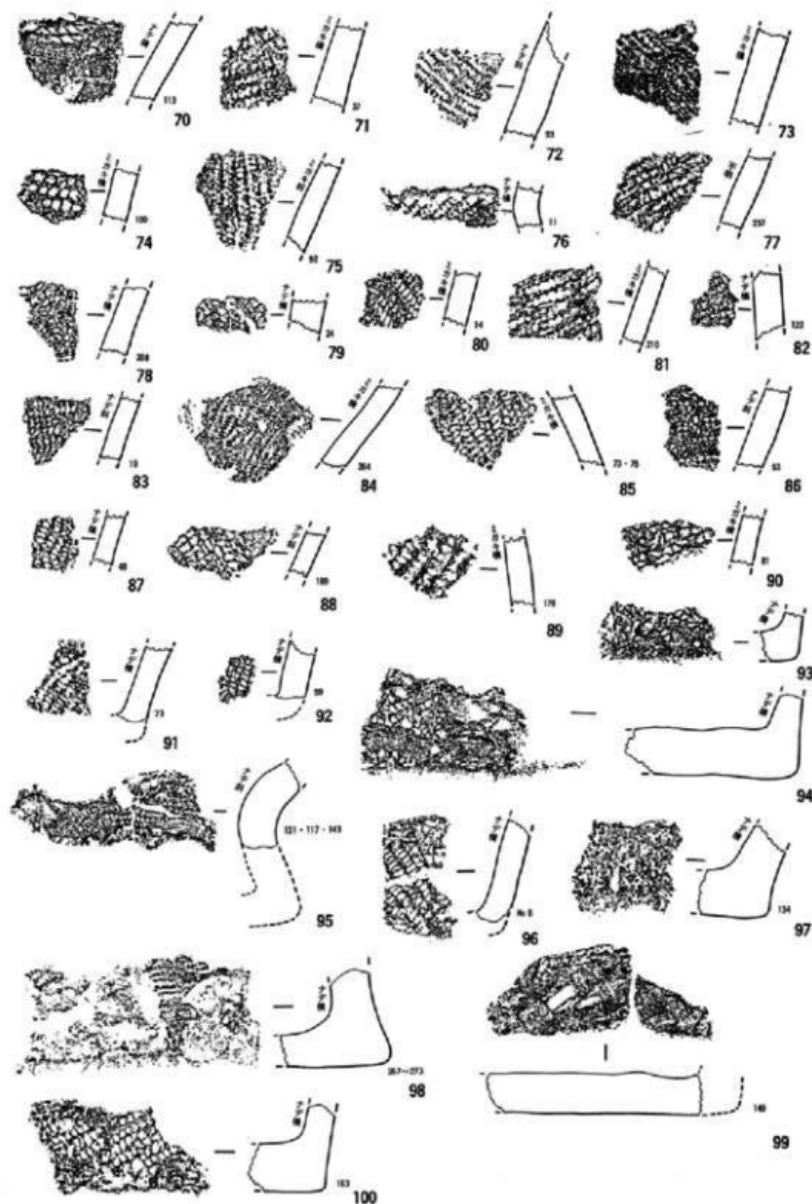


0 2 4 6 8 10 cm

第13図 犬籠C遺跡出土土器拓影図 (1)



第14図 荒縄C遺跡出土土器拓影図 (2)



第15図 筒窯C遺跡出土土器拓影図 (3)



4は頸部に一条の粘土紐を横位に貼付した後にキザミ目を加え、下方に範状工具の先端部で細い沈線文を縦位に施したものであり、全て小破片であるため年代を推測するのは困難であるが、織維の混入等からみれば前期初頭（大木2b式）に位置するものと考えたい。

B群土器〔第13図の5～7、第14図、第15図〕

第16図101の小型完形土器を除く全てが小破片であるため全体的な文様構成は不明であるが、あえて分類すれば次の7類となる。

B'類土器〔第13図5～7〕

口縁部付近に貼付文様を表出した土器群であり、粘土紐を横位に貼付した上端に無節3本多条縄文原体を圧痕したグループ5と、2単位（？）の縦位に貼付した梢円貼付文を口縁部に施すグループ第13図6・7の2通りがある。

B''類土器〔第13図8・9・12〕

太状の棒状工具を用いて文様を描く一群を一括した。3点認められており、8・9・12はたぶん口縁部に施文する横位に転開する山形文を有するものであろう。

B'''類土器〔第13図10・13・14〕

半截竹管を用いて突刺文を施すグループで、主に頸部に多用されている。10・13・14の3点が認められているが、上記のB'類、B''類の頸部にも用いられている場合も多く存在するが一応ここでは区別した。

B*類土器〔第13図15・16・18・19〕

頸部に施した横位の貼付文と平行沈線文のグループを一括した。15は二条の平行沈線文に棒状工具等でキザミを加えたもの。16は粘土貼付文と突刺文を施したもの。18は貼付文と沈線を施したもの。19は一条の粘土貼付文を施したものの4点がある。これらは先のB'''類と同様に、口縁部文様帯を区画する文様として配されたものとみられる。

B**類土器〔第13図21～24〕

同一固体の胴部文様帯の一群を一括した。破片であるため文様構成は不明であるが、半截竹管を用いた沈線を縦位に描いている。

B*類土器〔第13図25～33、第14図、第15図〕

縄文だけの土器片を一括した。全体的に称すると、LR・RL等の3本前に多状の縄文原体を転開するもの50・59・96・100他、同じく4本多条を有するもの17・47・85・89他、LR・RLの単節斜縄文を施すもの25～29・47・48・60・84他があり小破片で分析が困難なものも含まれているが、平均的には単節斜縄文が約2分の1を占める。

B'類土器〔第16図101〕

HY 18の北側床面から検出された。本遺跡唯一の完形土器である。口縁部が僅かに内傾気味を

呈しながら外反し、胴部がうっすらと膨らみ、下胴部が急速に曲しつつ底部にかけて直下する。所謂「吹浦式」土器に類似する器形を有している。大きさは口径4cm、器高4.3cm、底部2.7cmを有する小形土器であり、この種の小形土器は他に例がない。文様はなく、口縁部から頸部それに下胴部から底部にかけて横ナデを施し、胴部を指ナデで調整している。

(2)出土石器

今回の発掘調査で出土した石器は総数123点を数える。これらの石器の中で実測図を必要と認めた62点について、実測図及び形態分類表、計測表を作成したので参照願いたい。石器は剥片を素材とした剥片石器、自然礫を素材とした礫器に大別され、剥片石器は121点、礫器は2点であった。剥片石器の中で二次剥離調整を有す完成石器は11点にすぎず、他は剥片類が占める。完成石器を形態別に分類すると、石鎌（I群石器）3点、石箆状石器（VI群石器）1点、削器・搔器不定形石器（VII群石器）7点となる。剥片はa¹類4点、a²類2点、a³類1点、a⁴類7点、a⁵類2点、a⁶類1点、a⁷類5点、a⁸類1点、a⁹類5点、a¹⁰類2点、b¹類6点、b²類2点、b³類1点、b⁴類5点、b⁵類4点、b⁶類1点である。a形態（縦形剥片）の総計は25点、b形態（横形剥片）の総計は19点で、形態不明剥片は66点であった。形態不明剥片の多くは節理面を有し、同一母岩から剥離された剥片である。他は軟質な石材であるため風化が著しく打点がわからない剥片類が占める。礫器の2点は石皿1点、磨石1点である。出土状況は各遺構の覆土からが大半であった。次に各石器群について説明を加えたい。

I群石器[第 図102～104]

2形態が出土している。何れも両面調整によって左右対称に整形され、102、104は中央に稜線が発達している。103は一次剥離面を両面に残す剥離調整である。頁岩を素材としている。

VI群石器[第16図105]

縦形剥片を素材に用い両端が丸味を帯びる形態を有す。この石器は幅の狭い先端部を使用したものであることが、幅の広い先端部縁辺の観察から理解される。石箆状石器と呼ぶよりはむしろ槍形石器と呼んだ方がいいのかもしれない。

VII群石器[第16図106、107、第17図108～111]

刃部の形態から搔器の106、削器として107～111がある。108、109、111は意図的に幅の広い剥離面を整形し、使用時に手で持ちやすくしている。110の形態は当地において2例しか確認されていない。112は類例として示した。出土地点は米沢市八幡原遺跡群No25遺跡（八幡原A遺跡）である。年代は縄文時代前期末葉であり、本遺跡の年代と一致する。両者とも両端面の湾曲及び縁辺の剥離調査は非常によく似ている。「斧鎌形削器」と呼びたい。両端面の抉りを有す縁片は若干の使用痕が認められる。この湾曲縁辺がどの様な目的で整形されたのかは今後の研究課題とし諸氏のご意見を賜りたい。106は黒曜石を素材とした搔器である。本遺跡からは他に剥片（第20図135）1点が出土している。両者

とも自然面を有す。本市に所在する遺跡群からは少量ではあるが次の各遺跡より黒曜石を素材とした石器(石鎚が多い)が出土している。列挙すると八幡原No4, 5, 9, 30, 31遺跡、南原の窪遺跡、大塙遺跡、遠山の地蔵園遺跡などが挙げられる。107, 108, 109, 111の各石器縁辺には使用痕が観察された。

剥片[第18図113~118, 第19図119~128, 第20図130~136, 第21図137~146, 第22図147~153, 第23図154~161]

剥片類は小形な形状が多く、二次調整を加えた剥片は少ない。石材は前述した黒曜石剥片1点を除き全て頁岩で占められる。本遺跡が所在する地域の基盤をなす凝灰角礫岩にはブロック状に石器素材に適した岩石が含まれている。この石材は色調が灰白色、淡黄色、明緑灰を有し、風化しやすい特徴を有す。発掘が実施された梓川(天王川)流域の遺跡群からも少量ずつ確認されている。本遺跡出土の石器及び剥片類の中に、この石材を使用した石器は見あたらない。石材の採集地は本市の西方に位置する成島丘陵に求められる。

砾器[第24図162・163]

凝灰角礫岩を素材とした162は長円形状に整形された凹面を有し、磨面と縁辺の境が明瞭である。裏面及び縁辺は無調整で素材とした河原石の形状を保っている。163は花崗閃緑岩を素材に用い断面形態で示す様に幅の狭い側面に磨面を有す。石材の花崗閃緑岩は本遺跡が所在する梓川流域には産出しない。因にこの岩石は羽黒川流域上流に多い。他にHY 18より焼石が2点出土している。石材は何れも凝灰角礫岩である。

炭化物

HY 18より、ドングリの実が中央から割れた状態で2点出土している。

第2表 烈々C 遺跡出土石器計測表(長さ、幅、厚さ、重さ)

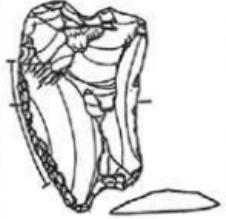
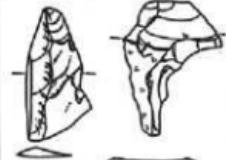
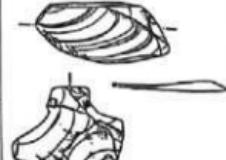
通し番	遺物名	掉図番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	形 象	剥離調整	備考
1	11	第16図102	XY 2		2.5	1.3	0.3	1	頁岩	I群c ¹ 類	I~III ab + R ^{4~6}	
2	224	第16図104	XY 3		(2.0)	1.9	0.5	2	頁岩	I群c ² 類	I~III ab + R ^{4~6}	先端部欠損
3	24	第16図106	HY 18		1.9	1.6	0.3	1	頁岩	I群c ² 類	I~III ab + R ^{4~6}	
4	174	第16図105	HY 18		6.1	2.0	0.8	15	頁岩	Ⅲ群b ¹ 類	I~III ab + R ^{7~9}	
5	60	第16図106	XY 3		3.4	2.1	0.7	6	黒曜石	Ⅲ群b ² 類	I~III ab + R ^{5~6}	使用痕有り
6	168	第16図107	G 22~18	Ⅱ層	4.7	(8.8)	1.6	5.5	頁岩	Ⅲ群c ¹ 類	Ⅲ ab + R ^{7~8}	欠損面有り
7	186	第17図111	HY 18		4.0	4.3	1.1	20	頁岩	Ⅲ群c ¹ 類	I~III ab + R ^{7~9}	使用痕有り
8	121	第17図108	XY 17		3.3	3.0	0.9	9	頁岩	Ⅲ群c ² 類	I~Ⅲ ab + R ^{7~8}	使用痕有り
9	173	第17図109	HY 18		3.8	2.2	0.6	9	頁岩	Ⅲ群c ² 類	I~IV ab + R ^{7~9}	使用痕有り
10	111	第17図110	HY 18		5.7	3.8	0.7	18	頁岩	Ⅲ群j ¹ 類	I~IV ab + R ^{7~8}	使用痕有り
11		第17図112	八幡原No25		6.1	4.2	0.4	17	頁岩	Ⅲ群j ¹ 類	I~IV ab + R ^{7~9}	使用痕有り
12	51	第18図116	XY 3		4.3	3.0	0.4	4	頁岩	a ² 類		
13	214	第18図113	XY 17		3.6	1.8	0.3	3	頁岩	a ² 類		
14	70	第18図115	G 18~18	Ⅱ層	5.7	3.8	2.4	38	頁岩	a ² 類	II~III a + R ^{8~9}	自然面有り
15	10	第18図116	G 18~14	Ⅱ層	4.8	2.9	1.4	18	頁岩	a ² 類	II~III ab + R ^{7~9}	
16	202	第18図118	HY 19		9.5	2.2	2.3	40	頁岩	a ² 類	I~III b + R ^{7~9}	
17	185	第18図117	XY 18		2.6	1.9	0.3	2	頁岩	a ³ +IC類		
18	253	第19図119	XY 17		4.3	4.0	0.4	4	頁岩	a ⁴ 類		ハジケ面有り
19	226	第19図120	XY 17		2.0	2.2	0.4	3	頁岩	a ⁴ 類		バルブ除去
20	52	第19図126	XY 3		2.5	1.2	0.3	1	頁岩	a ⁵ 類		

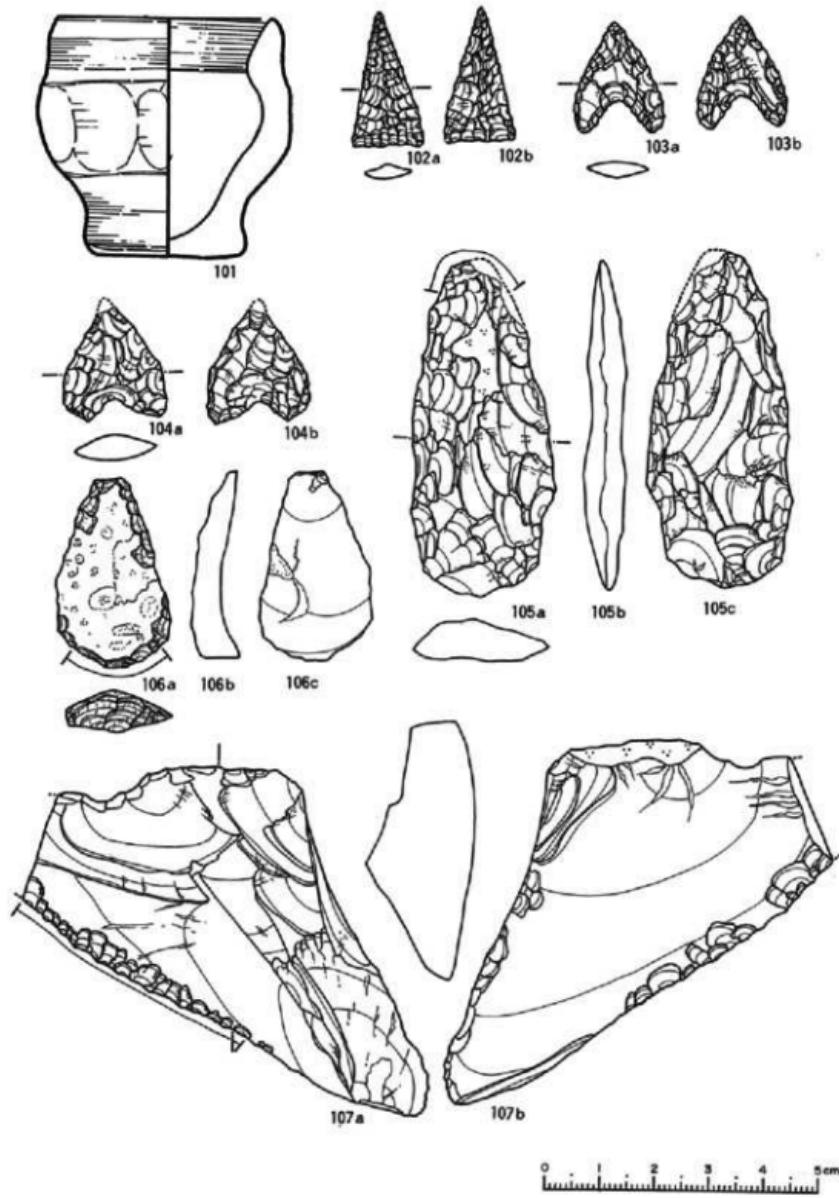
通し番	遺物名	排図番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	形態	剥離調整	備考
21	17	第19回123	G 22-18	II層	4.2	2.3	0.5	6	頁岩	a'類		
22	51	第19回125	XY 3		4.0	2.1	0.3	3	頁岩	a'類		バルブ除去
23	114	第19回124	XY 17		3.6	2.4	0.4	3	頁岩	a'類		
24	167	第19回122	XY 17		(3.9)	2.2	0.5	4	頁岩	a'類		
25	26	第19回121	G 22-18	II層	3.8	1.2	0.9	6	頁岩	a'類	II a + R 7-*	
26	65	第19回127	XY 3		3.4	2.8	0.5	5	頁岩	a'類 + IA類		
27	179	第19回128	XY 17		2.5	1.4	0.5	2	頁岩	a'類		
28	18	第19回129	HY 18		2.1	1.2	0.3	2	頁岩	a'類		
29	7	第20回130	G 18-14	II層	3.5	2.0	0.3	3	頁岩	a'類		
30	51	第23回160	XY 3		2.0	2.6	0.5	4	頁岩	a'類		
31	212	第20回134	XY 17		5.7	5.6	1.5	50	頁岩	a'類	III · IV b + R 9	
32	32	第20回132	G 22-18	II層	2.2	1.6	0.3	1	頁岩	a'類		
33	33	第20回133	XY 17		(1.5)	(2.8)	0.4	2	頁岩	a'類 + c類		欠損面有り
34	232	第20回131	XY 3		3.6	3.0	0.4	6	頁岩	a'類		バルブ除去
35	161	第20回135	G 14-18	III層	3.0	2.6	0.7	5	黑曜石	a'類	II · III a + R 8-*	自然面有り
36	62	第21回137	HY 6		3.8	2.7	0.3	2	頁岩	a'類		自然面有り
37	123	第20回136	G 22-18	III層	5.0	4.3	1.0	18	頁岩	a'類		自然面有り
38	169	第21回140	XY 17		(1.9)	3.0	0.3	2	頁岩	ax - A		欠損面有り
39	102	第21回138	G 14-18	III層	(2.2)	1.6	0.3	2	頁岩	ax - A		欠損面有り
40	63	第21回139	XY 3		(1.4)	2.2	0.3	2	頁岩	ax - A		欠損面有り
41	57	第22回148	G 18-18	II層	0.6	4.4	5.0	17	頁岩	b'類		
42	158	第21回145	G 22-18	II層	0.6	4.5	0.5	15	頁岩	b'類		
43	21	第21回145	G 22-18	II層	2.6	3.1	0.4	3	頁岩	b'類		
44	27	第21回142	DY 31		1.6	2.2	0.3	2	頁岩	b'類		
45	58	第21回144	XY 3		1.8	2.1	0.5	3	頁岩	b'類	Ia + R 8	
46	187	第21回146	HY 18		2.5	2.6	0.3	2	頁岩	b'類		
47	4	第21回141	HY 4		3.8	4.6	1.0	18	頁岩	b'類	I · II a + R 8-*	
48	23	第22回149	G 22-18	II層	3.1	5.1	1.6	20	頁岩	b'類		
49	165	第23回167	GY 16		4.1	6.7	2.0	45	頁岩	b'類 + IA類		自然面有り
50	126	第22回159	G 22-18	II層	2.7	3.1	0.6	4	頁岩	b'類		
51	137	第23回154	XY 17		3.5	4.9	0.9	1.5	頁岩	b'類		自然面有り
52	67	第23回156	XY 3		4.5	5.5	1.6	30	頁岩	b'類	IV b + R 8	
53	176	第22回153	G 22-18	III層	2.7	3.4	0.6	3	頁岩	b'類	Ia + R 7	
54	170	第22回151	XY 17		1.6	3.6	0.3	3	頁岩	b'類		
55	66	第22回152	XY 3		2.1	3.9	0.4	3	頁岩	b'類		バルブ除去
56	101	第23回155	G 14-18	III層	2.2	2.3	0.2	1	頁岩	b'類		
57	25	第23回159	G 22-18	II層	1.9	2.3	0.2	2	頁岩	b'類		
58	43	第23回157	XY 3		1.0	2.3	0.4	1	頁岩	b'類		
59	215	第23回158	XY 17		2.0	2.8	0.3	2	頁岩	b'類		
60	119	第23回161	G 18-18	III層	4.5	5.2	0.7	12	頁岩	b'類		
61	24	第24回162	HY 6		36.5	20.5	4.8	3 kg	板灰 角礫岩 花崗岩 閃綠岩	石皿		自然面有り
62	146	第24回163	G 18-18	III層	13.8	4.8	4.3	770	磨石			

第3表 箕箆C遺跡出土石器形態分類表〔I群石器c'類一羅群石器f'類〕(長さ、幅、厚さcm、重さg)

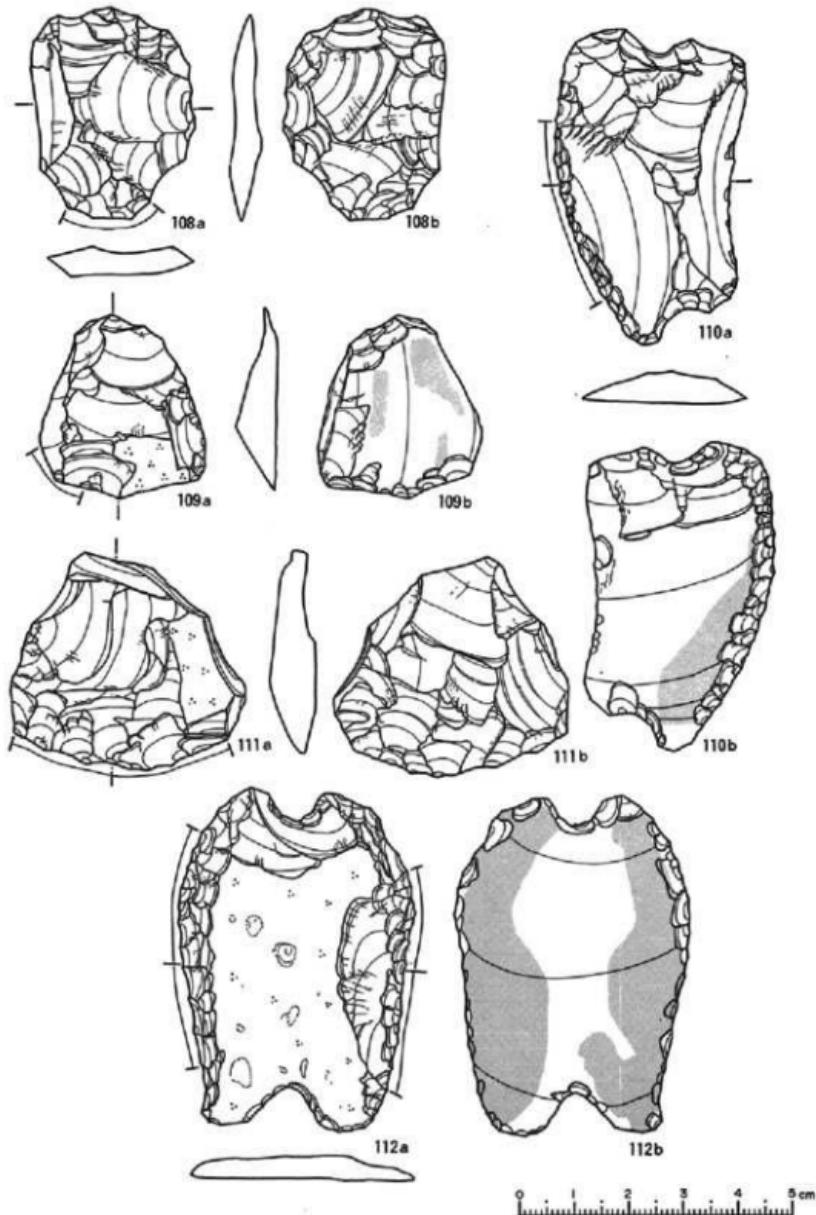
		形態	特徴	計測平均	掲番号	層位	遺構出土
I群 石器	c'類		基部が平坦で小形な石器を本類とした。	長さ 2.5 cm 幅 1.3 cm 厚さ 0.3 cm 重さ 1 g	第16回102		XY 2 1点
	e'類		基部が内湾し脚部が両縁辺に対して直下する石器を本類とした。	長さ 1.9 cm 幅 1.8 cm 厚さ 0.4 cm 重さ 1.5 g	第16回103 104		HY 18 2点
VI群 石器	b'類		基部が尖状を有す石状石器を本類とした。 両面調整で整形され、刃部は丸味を帯びる。 基部先端部には使用痕が認められる。この部分が使用縁辺であろう。	長さ 6.1 cm 幅 2.0 cm 厚さ 0.8 cm 重さ 15 g	第16回105		HY 18 1点
	b''類		黒曜石を素材としたエンド・スクレーバーである。 片面調整で整形し、基部と刃部に剥離調整が集中している。	長さ 3.4 cm 幅 2.1 cm 厚さ 0.7 cm 重さ 6 g	第16回106		XY 3 1点
VII群 石器	f'類		台形状を呈する石器群を羅群f'類とした。さらに剥離調整等を吟味し細類を加えた。 刃部に剥離調整が集中する石器をf'類とした。	長さ 3.8 cm 幅 3.5 cm 厚さ 1.0 cm 重さ 15 g	第17回108 111		HY 18 1点 XY 17 1点
	f''類		両極打法(ピエス・エスキュー)により整形された石器群をf''類とした。実線で示した縁辺に使用痕が認められた。	長さ 3.8 cm 幅 2.9 cm 厚さ 0.6 cm 重さ 9 g	第17回108		HY 18 1点

〔縄群石器 e¹類～剝片 a¹・b¹類〕

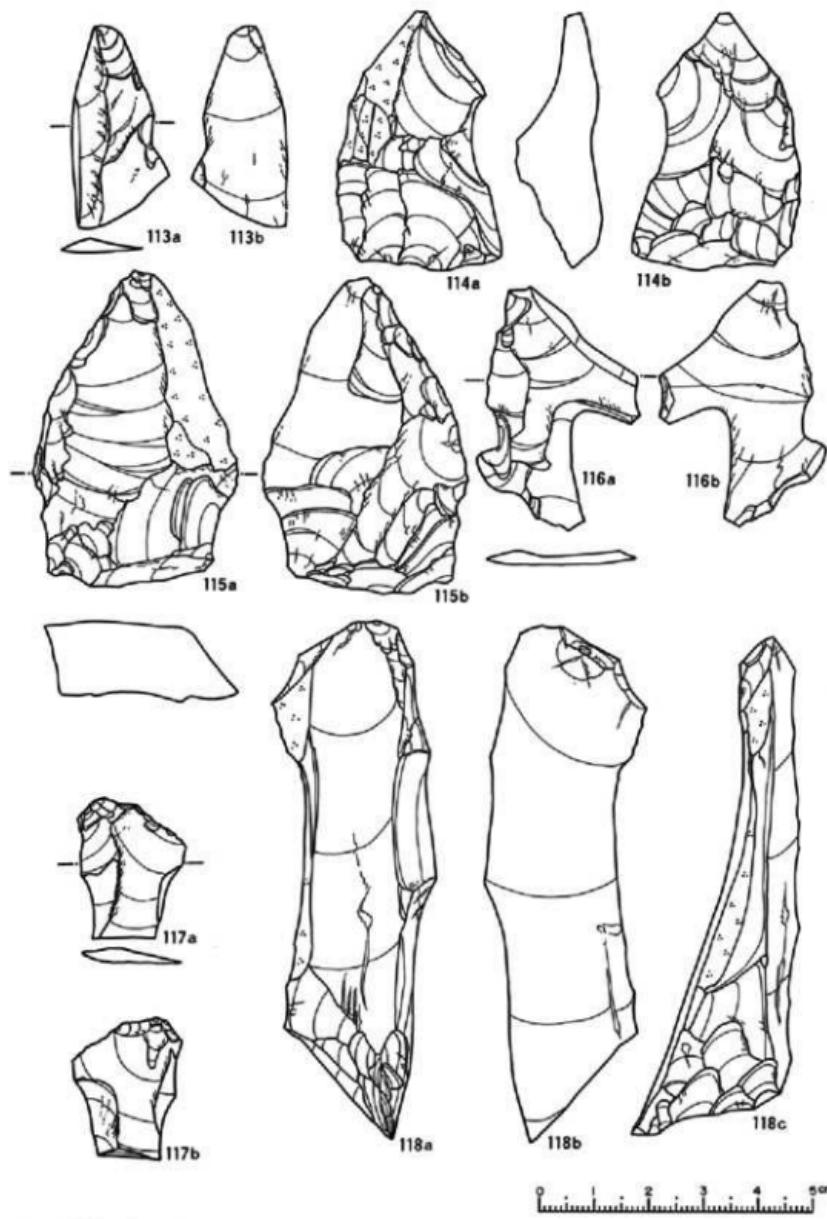
	形 象	特 徴	計測平均	掲図番号	層位	遺構 出土	
縄 群 石 器	e ¹ 類		横長の剥片を素材に用い、素材の形態を残す剥離調整を施す。左端が欠損しているがおそらく、両端が尖状を有する形態であろう。平坦な縁辺の剥離調整が集中する箇所に使用痕が認められる。	長さ 4.7 cm 幅 (8.8) cm 厚さ 1.6 cm 重さ 55 g	第16図10	Ⅲ層 1点	
	j ¹ 類		両端縁辺の中央部に湾曲を有するのが本群石器の最大の特徴である。 実線で示した縁辺は両面調整で菱形され磨滅痕が認められた。	長さ 5.7 cm 幅 3.8 cm 厚さ 0.7 cm 重さ 18 g	第17図10	HY 18 1点	
剝 片 類	a 形態	 	剥片類は複数剥片を a 類、横形剥片を b 類の两者に大別し、さらに剥片の形態から b 類は a ¹ ～a ² に、b 類は b ¹ ～b ² にそれぞれ細別した。この表ではその代表を a 類は 4 点、b 類は 2 点表示した。 なお各剥片の形態については米沢市埋蔵文化報告書第 5 集 33 頁第 4 表に詳しい。今回は第 1 表に各剥片の計測表、出土地点を示しておいたので参考願う。	剝 片 に つ い て は 計 測 表 参 照			
	b 形態						



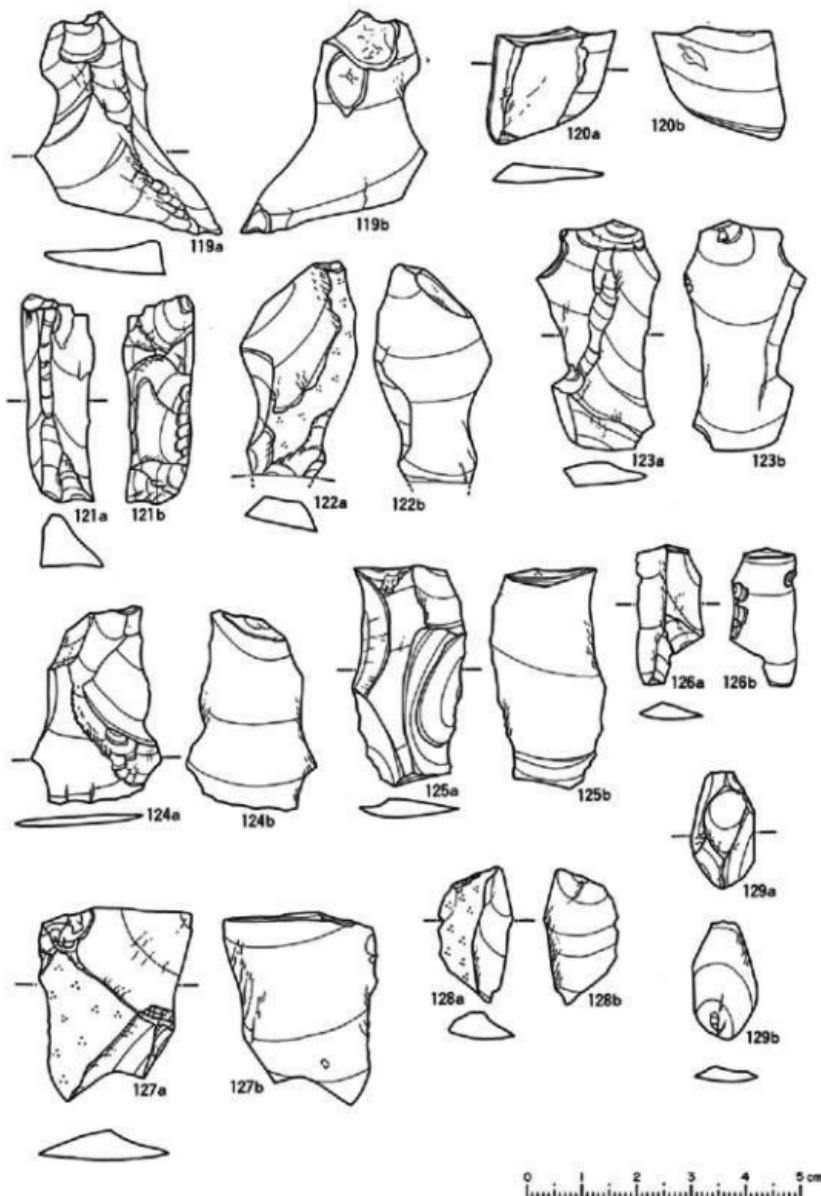
第16図 荒籠C 進跡出土土器、石器実測図 (1)



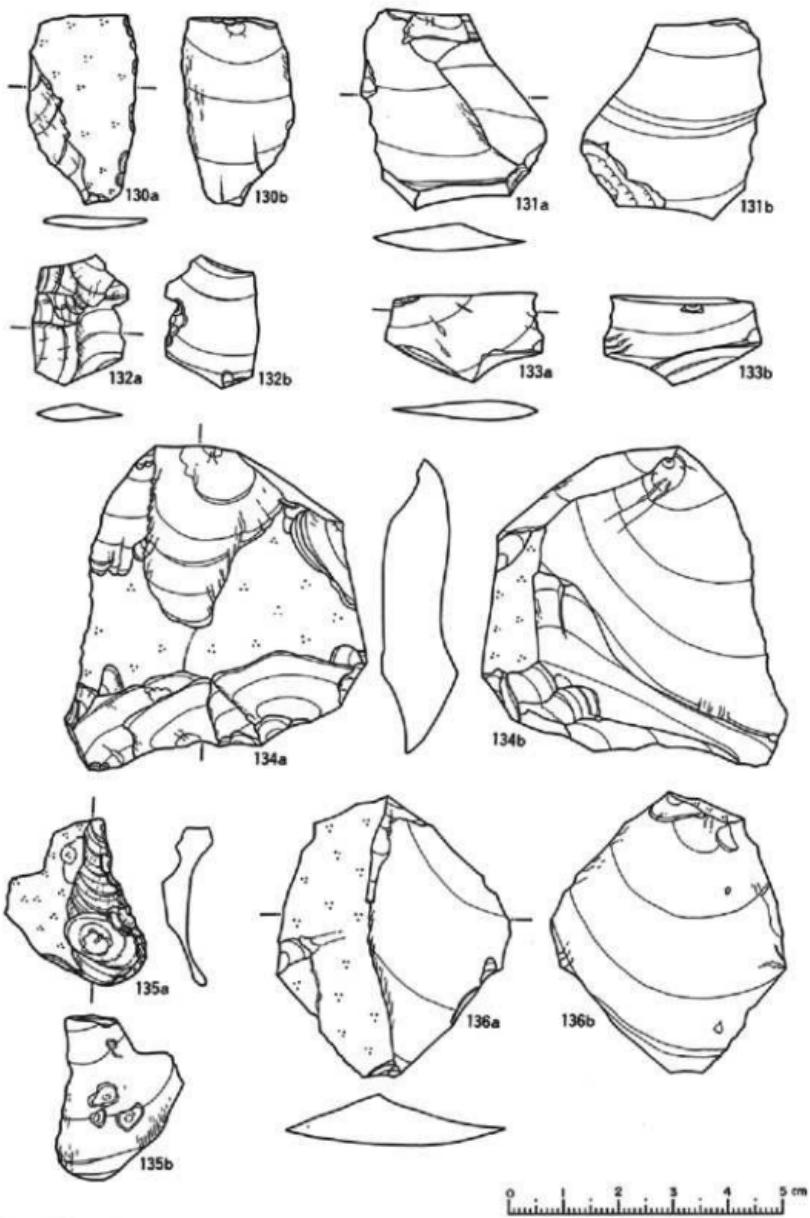
第17図 荒籠C遺跡出土石器実測図 (2)



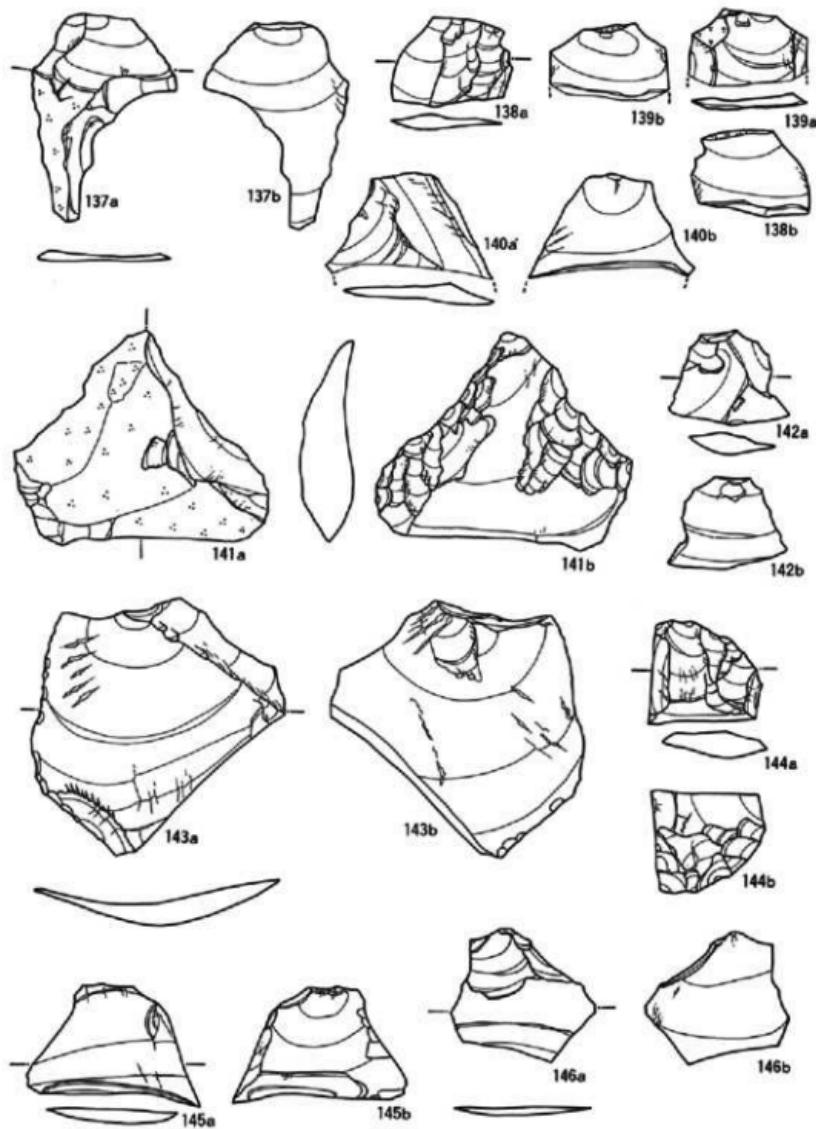
第18図 荒縄C遺跡出土石器実測図 (3)



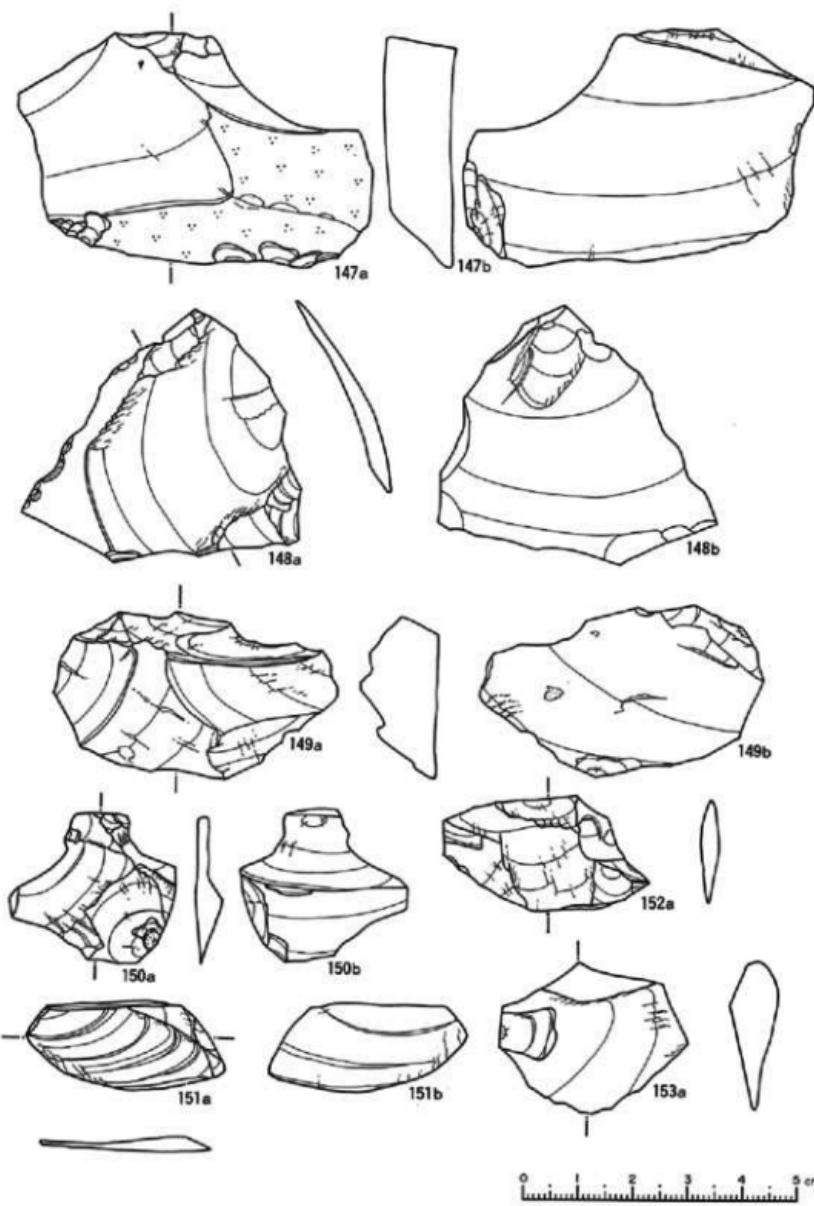
第19図 荒籠C遺跡出土石器実測図 (4)



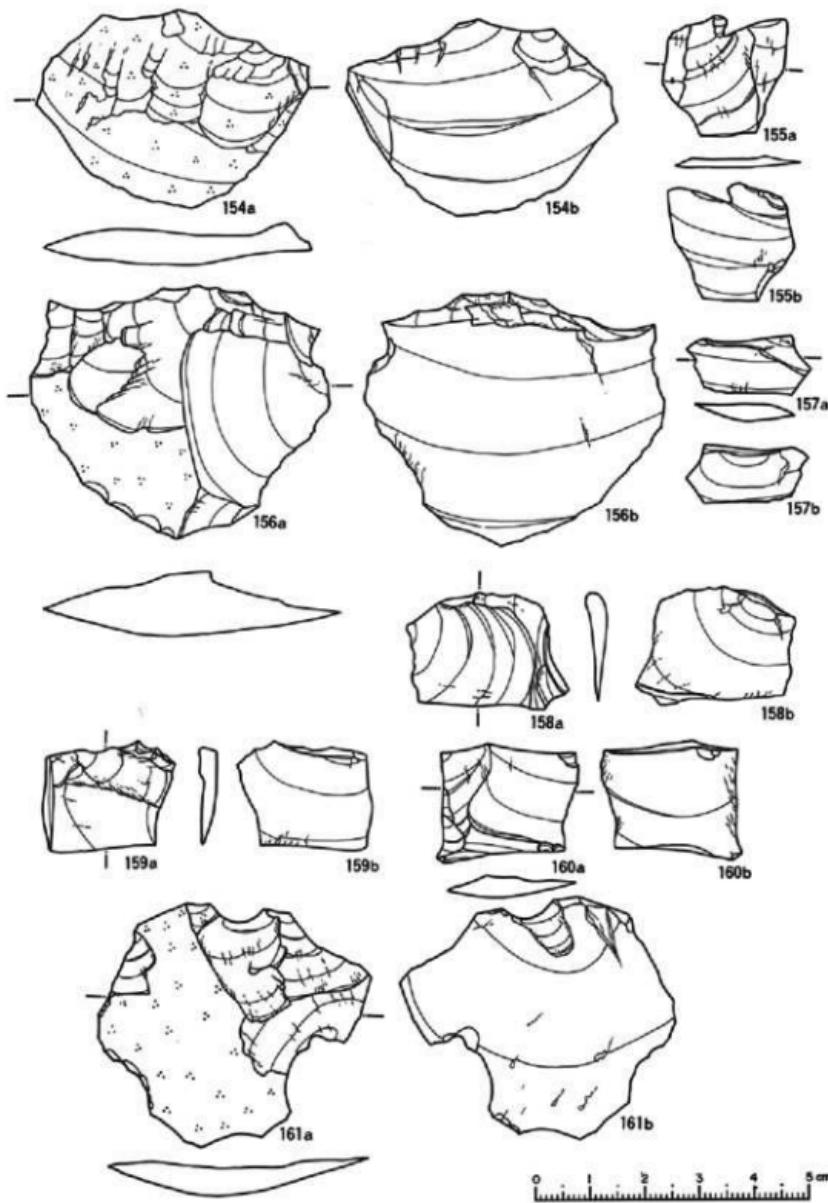
第20図 荒籠C遺跡出土石器実測図 (5)



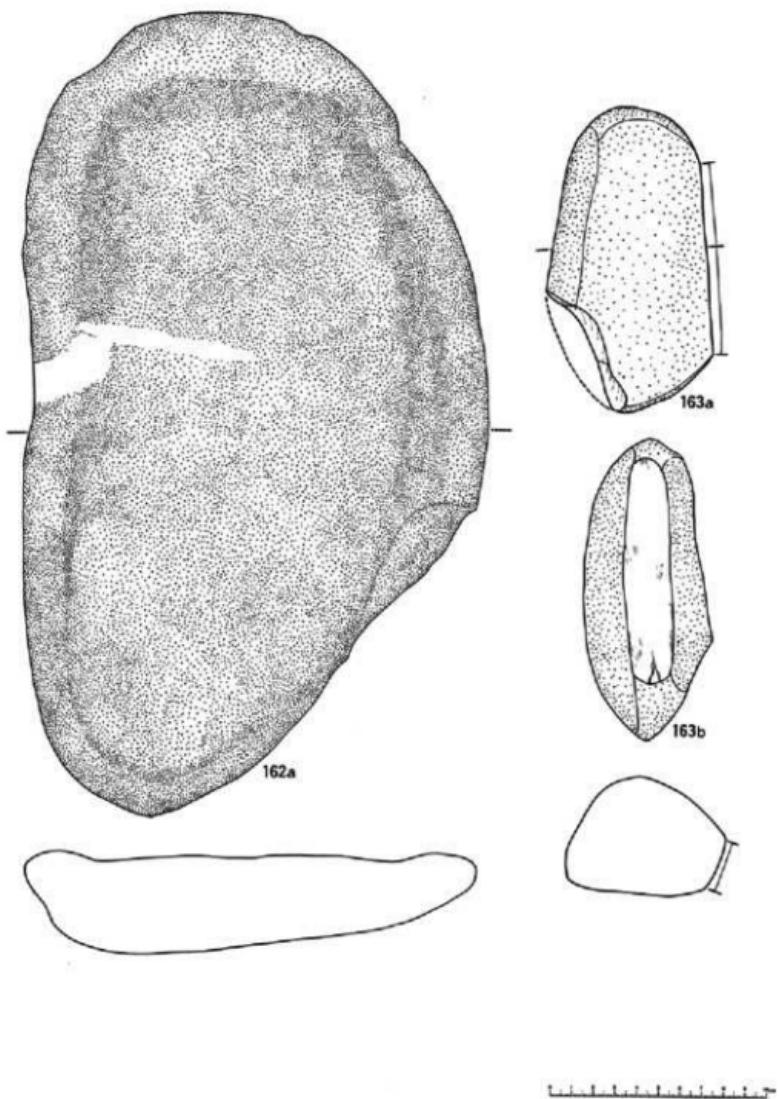
第21図 荒籠C遺跡出土石器実測図 (6)



第22図 荒籠C遺跡出土石器実測図 (7)



第23図 箕輪C遺跡出土石器実測図 (8)



第24図 荒縄C遺跡出土織器実測図

Vまとめ

梓川流域の遺跡群に関しては、八幡原周辺及び戸塚山周辺の両遺跡群が大型開発や学術調査によって多くの発掘調査が実施され、多数の成果を得たことから注目されてきたが、梓川上流域ことに笊籠遺跡群が集中する最上流域一帯は殆ど不明であった。今回の笊籠c遺跡の発掘調査で得た資料は、今後の梓川流域の遺跡群を知る上で重要な意味をもつ。ここでは過去に調査を実施した八幡原遺跡群等の扇状地内から検出された成果と、本遺跡で得られた資料を比較してまとめたい。

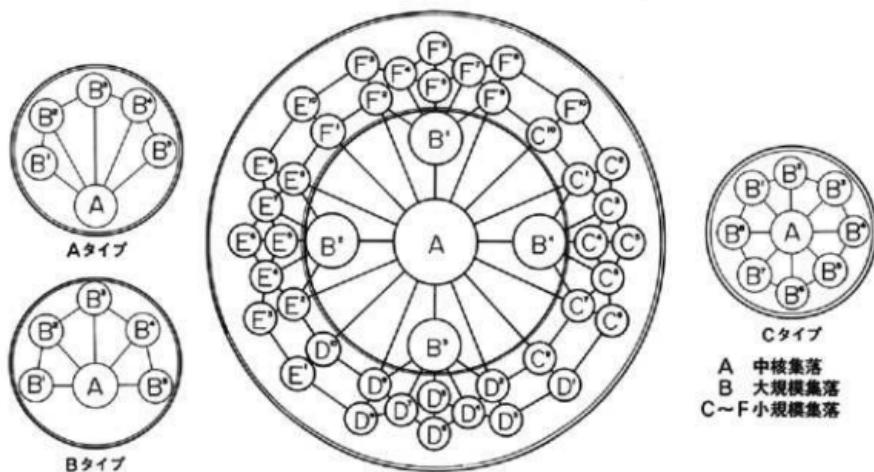
(1)集落構成

米沢市内からこれまでに検出された縄文前期末葉の住居跡は、山上地区の白旗遺跡1棟、矢子地区の大日向c遺跡1棟、万世地区の大清水遺跡6棟、八幡原B遺跡1棟とそれに今回発見された8棟の竪穴住居跡を含め計17棟が今現在認められている。白旗・矢子大日向c・八幡原B遺跡の各1棟は別にしても、全体的な集落構成を把握できたのは大清水遺跡と笊籠c遺跡の2遺跡にすぎない。先の大清水遺跡は、中央の広場を中心にして馬蹄形状に6棟住居跡を配置して集落を構成しているが、笊籠c遺跡の8棟の住居跡は切り合い関係等の吟味から、HY 1・HY 6・HY 19・HY 46が早く、HY 4・HY 5・HY 18・HY 45の4棟の住居跡が後に構築したことが判った。土器群の分析では年代差が殆どないことからすれば、長期の集落構成ではなく一時的な集落が短時間の中で形成されたと考えるべきで、定着型の大清水遺跡とは明らかに異なっている。住居跡の大きさも、大清水遺跡は楕円形プランを主にした4.3~6.6mと大きく、笊籠c遺跡の3.5~5mと比較しても規模的に違いがみえる。但し住居内に炉が認められないことや、住居跡の壁が浅く壁柱穴が等間隔でめぐる特徴は、両遺跡はもとより白旗・八幡原B・矢子大日向c遺跡とも共通しており、当時の米沢盆地における縄文前期末葉期の文化を知る上で興味深いものといえよう。

一方、昭和60年~同61年の三ヶ年を要して発掘調査が実施された高畠町の押出遺跡からは、柱を打ち込んで構築された平地形の特異な住居跡が35棟検出され、それに大陸文化の影響を示唆する彩文土器、櫛、らん胎漆器、櫛等の多量の木製品、夥しい土器群の他、植物性のクッキー等々全国的に注目される遺構・遺物も発見されている。

また土器群の中には、東北南部偏年の大木系土器群の他に関東地方を中心とする浮島式・関東地方~中部地方に多い諸磯式も出土し、かなり広い範囲の文化交流が存在していたものとみられる。

さて、笊籠c遺跡を含めた米沢市内発見の17棟の住居跡の一連の特徴からすれば、縄文前期末葉期の住居跡構造に大差ないことを認識せざるを得ない。だが一方では押出遺跡の様に住居跡の構造が著しく異なっていることや米沢市内の同じ縄文前期末葉期の遺跡から検出される遺物と比較しても驚異的な貧困の差が生じ、関東文化との濃厚な関連性等から鑑みても特殊な遺跡と考えるべきものといえよう。



第25図 地方文化圏概念図

我々は所謂米沢市内から発見されている住居、あえて集落とするが、少なくとも米沢盆地内の基本的な集落構成と考えている。押出遺跡は、当時の地方文化の（敢て米沢盆地という）社会経済の中心的な役割を呈する拠点として存在したと推測され、内外の文化圏の情報・経済の物質的な（今で言えば都市的な）交易の場として成立したものと考えることも可能であろう。

縄文時代の文化・経済の高度な発達は、福井県島浜貝塚、富山県真脇遺跡、そして押出遺跡等の湿地遺跡の発掘で次々と明らかにされてきており、従来の集落との係わりを追求することによって地方文化圏と日本列島全体の幾つかの文化圏とのつながりも明確になっていくものといえよう。

今回検出された笊籬C遺跡の8棟の住居跡群は、八幡原遺跡群との関連性とも合わせ、今後の集落跡研究に重要な資料を加えたと言っても過言ではない。最後に笊籬C遺跡を通し、八幡原遺跡群、押出遺跡群の遺跡より、地方文化圏の構造についての仮説を述べておく。

地方文化圏とは筆者等の推測した限りでは、約10~30km単位をテリトリーとした地方特有の文化集団の区画範囲であり、当地方では、小国を除く上山の一部を加えた範囲を想定している。もちろんこれは縄文前期末葉期に限定したものであり、各時期において若干の相異があることは言うまでもない。

第25図に示したのは基本的な考え方とした地方文化圏の概念図であり、便宜的に円で示しているので距離や方向は省略した。文化圏は基本的に三重の構造を呈するものと考える。中核のAは

他の文化圏との経済的・文化的交流を図る中心集落で、高畠町押出遺跡を核と考え、B¹～B⁴は適地を選出して構成する大規模集落跡、C¹～F¹⁰は大規模集落と密接に係わりを呈する山谷地区の狭い範囲を利用して集落を構成する小規模集落を図化したものである。但し、置賜地方の遺跡を全て把握したわけではないので、必ずしも図のような構成を示すとは断言できないが、あえて言及すればB¹を八幡原周辺の遺跡群とし、F¹～F¹⁰は米沢地区の小規模遺跡であり、笊籠c遺跡を含めた笊籠遺跡群の仲間もこれに加わる。B⁵は高畠を中心とした大規模遺跡とE¹～E¹⁰は同じくその周辺に分布する小規模遺跡、以下、B⁶が長井・白鷹地区で、C¹～C¹⁰はその周辺、B⁷が南陽・上山地区でD¹～D¹⁰がその周辺となる。なお第25図で示した大規模集落B¹～B⁴は4単位としているが、あくまでも図であり、4単位以上を前提としており、少なくとも10遺跡は存在するものと考えられる。

そして全体的な地方文化圏は、山形県で推測すれば最上・村山・庄内に各1～2は存在するものとみられ、概略6単位が存在すると考えられる。そして宮城県10、福島県9（何れも推定）を加えた25単位が、所謂『大木文化圏』となるものであろう。なお地方文化圏を形成する形態としては第25図に示したA～Cタイプの3種類が存在するものとみられ、当方における文化圏はBタイプに近いものと推測する。

(2)風倒木坑

笊籠c遺跡の5基の風倒木坑を含め、米沢市内から検出された風倒木坑は以外に多い。昭和50年度発掘の八幡原工業団地造成地内からは清水北c遺跡より2基、八幡原B遺跡2基、竹井境遺跡から3基、桑山遺跡群の水神前遺跡1基、柿の木遺跡3基、大清水遺跡6基、ニタ侯A遺跡12基、法将寺遺跡1基の計35基がこれまでに発見されている。

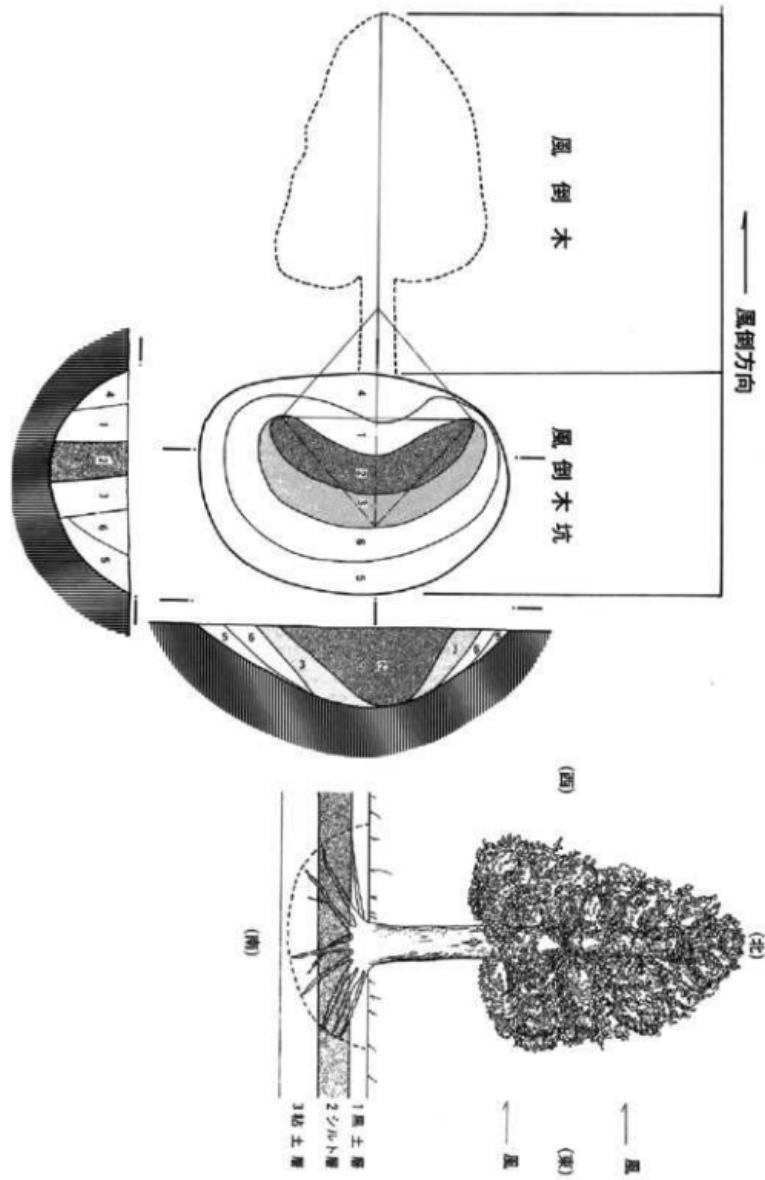
風倒木坑は言うまでもなく、突風や台風の強い風によって大木が根こそぎ倒れ、根の密集範囲が土砂とともに抉り取られた穴状を呈する痕跡を風倒木坑と言う。しかし、遺跡から検出される所謂「風倒木」は風倒した木根部分の穴状跡に後世の堆積土層が埋った自然構造を指しており厳密には風倒木痕跡穴と呼称すべきである。

今回の笊籠c遺跡の発掘調査で検出されたのを機会に風倒木に関する問題等も吟味し、筆者なりの考え方を述べてみよう。

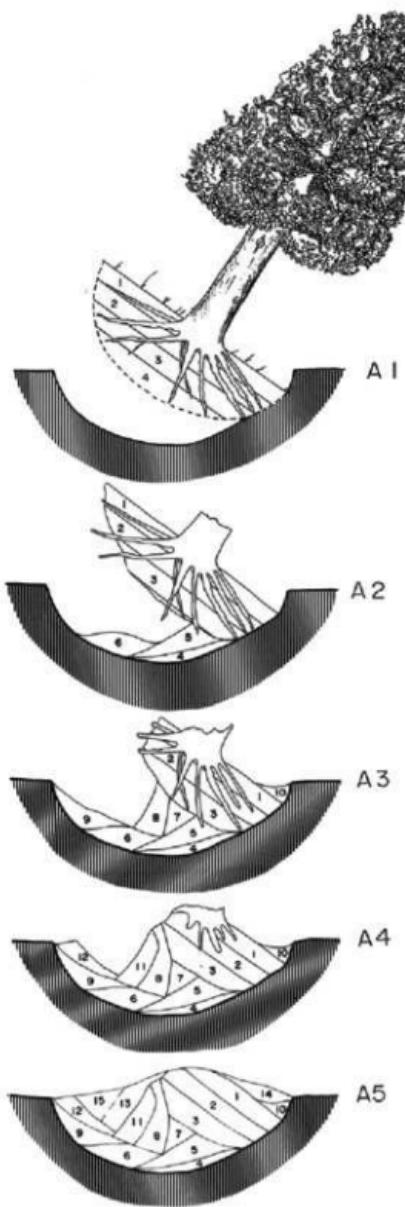
1) 風倒木の規定

すでに先述した様に、風倒木とは風によって風倒した大木の及び根の範囲が盛り上って穴状になった跡も含めて一括した形で呼ばれてきた。しかし、通常の遺跡内で検出される大半は穴状の痕跡穴であり、風倒木と風倒木坑に区別する必要がある。

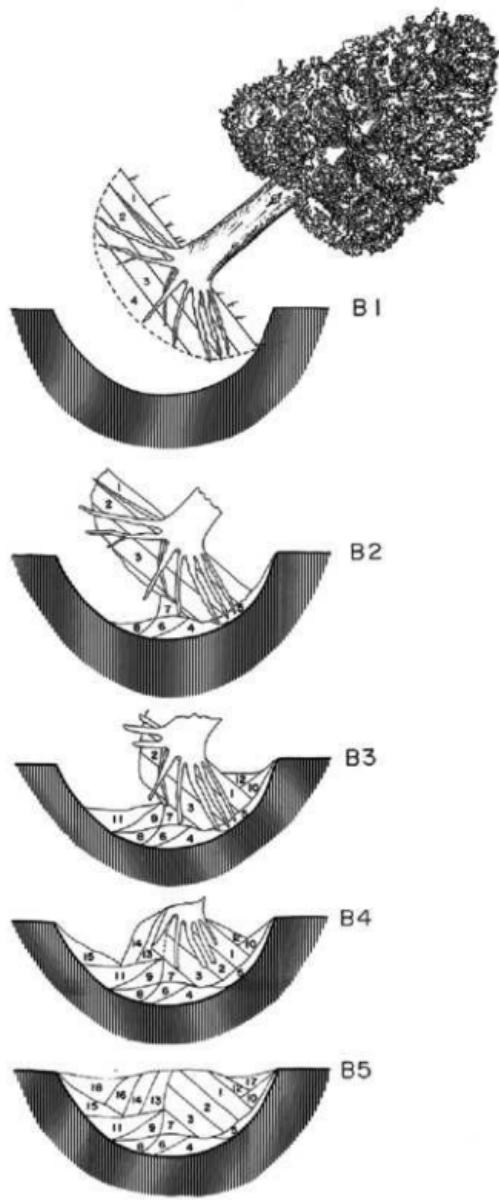
第26図に示した風倒木概念図は立木が風倒した跡地にどの様に堆積するかを簡単に模式化したものであり、米沢市の中心的な層序を1層（黒土層）、2層（シルト層）、3層（粘土層）として



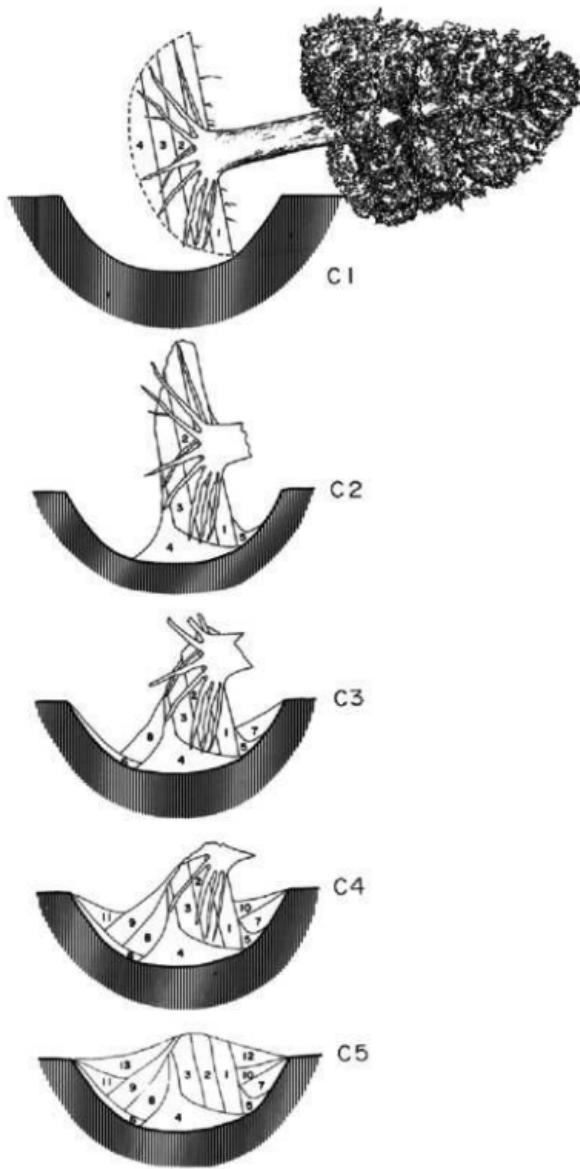
第26図 風倒木坑概念図



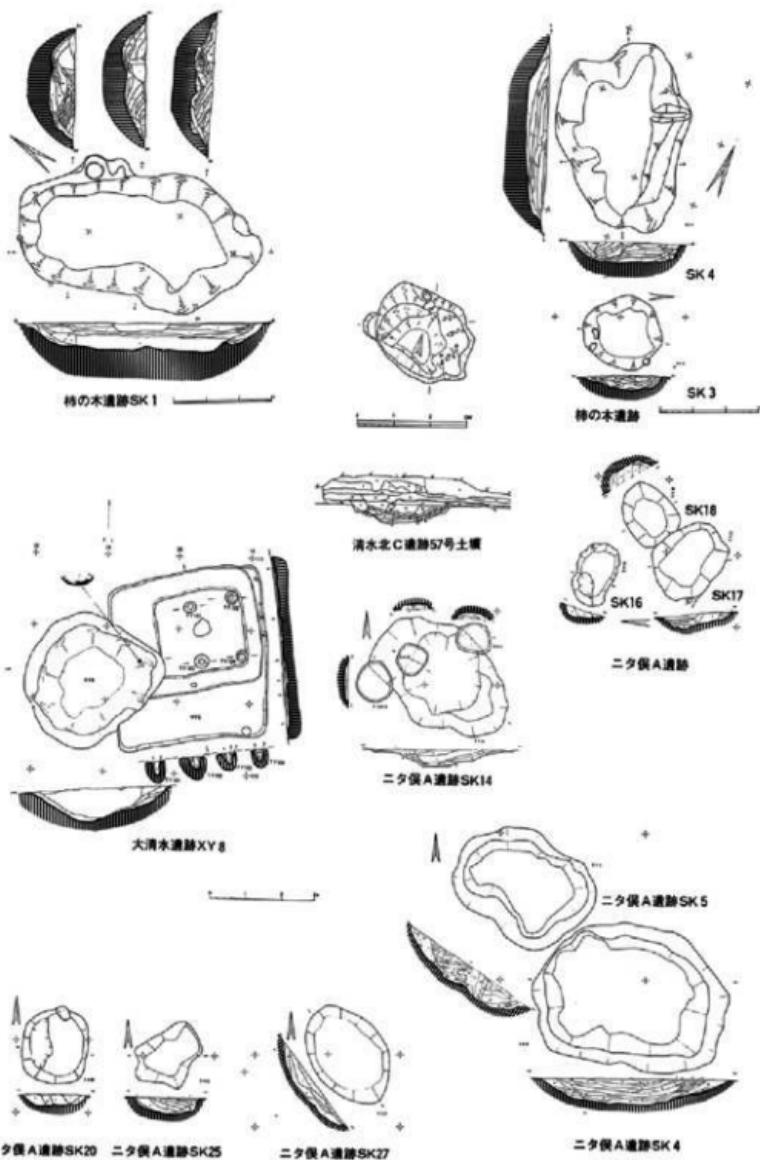
第27図 風倒木坑堆積順位想定図 (1)



第28図 風倒木坑堆積順位想定図 (2)



第29図 風倒木坑堆積順位想定図 (3)



第30図 米沢市内出土の風倒木坑

当てはめている。大木の根が1～3層に食い込んでいる前提に立ち、風倒した木根は土層とともに90°の角度に設定した。

風倒木坑は風の方向（仮に東から西方向に吹いたとする）とは相反して南北長の梢円形プランの穴跡を示す割合が高く、風倒の為に開口した空間に後世の堆積土と風倒して立土した木根部分の土砂が崩れて堆積したのが4～6層であり、基本的な断面位の層序と平面的な土色変化は通常の場合は共通するものが多い。しかも平面の土層をセクションで描くと、中央に地山層（ここでは2・3層）を置く公算が顕著であり、風倒方向に弧状に内曲する線が表出する。しかるに弧状の端を結んだ直角方向が風倒方向と理解できるのである。

よって風倒木の風倒方向を明確に層序で確認する方法としては長軸方向よりも短軸方向（ここでは南北方向）が望ましいと言える。

2) 風倒木坑の層序【第27図～第30図】

風倒木によって風倒した大木の大きさ、角度、土質や堆積速度によって風倒木坑内の層序が異なることは当然であるが、米沢市内からこれまでに検出された風倒木坑の分析により、A～Cの三形態の堆積順位を5段階に区分して想定した。

数多くの問題はあるが、紙数の都合もあり詳しく解れることができないのは残念であるが、第21図はAグループとし、約45°の角度で風倒した風倒木坑をA'～A''の順位で想定したもの。第28図はBグループであり、約75°の角度で風倒した風倒木坑内の堆積層をB'～B''の順位で想定した。最後の第29図はCグループとし、約90°の角度で風倒した風倒木坑の堆積層をC'～C''の順位で想定したものであり、従来の基本層序1～4を比較すれば、それぞれの風倒角度が予想される。

第30図は米沢市内から検出された風倒木坑の代表であるが、上記の想定図に当てはめれば、柿の木遺跡SK1はBグループ、ニタ俣A遺跡SK5、SK16、SK18、SK20の4基がAグループ、柿の木遺跡SK4がCグループにそれぞれ比定されよう。

他は主軸方向、つまり風倒方向とは逆のセクション図であるため困難となる。以上簡単に風倒木について述べてきたが、この種の自然遺構は全国各地で発見されているにもかかわらず、一方では不明土壤や大胆な分析になれば風倒木特有の土層の天地返しを人工的な堆積層と誤認し、墓壙等と断定している例も少なくない。この様な現状を懸念し、あえて今回の論考を付け加えた訳である。大方の御批判を乞う次第である。

参考文献

- 柏倉亮吉・加藤 稔・手塚 孝 (1976~1977)『米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書』第1集~第3集 米沢市教育委員会
- 手塚 孝・菊地政信 (1982)『米沢市万世町桑山団地造成地内埋蔵文化財調査報告書第Ⅰ集』
米沢市埋蔵文化財調査報告書第6集 米沢市教育委員会
- 手塚 孝・菊地政信 (1983)『米沢市万世町桑山団地造成地内埋蔵文化財調査報告書第Ⅱ集』
米沢市埋蔵文化財調査報告書第8集 米沢市教育委員会
- 手塚 孝・菊地政信 (1985)「法将寺」米沢市埋蔵文化財調査報告書第12集 米沢市教育委員会
- 菊地政信 (1985)『白旗遺跡』米沢市埋蔵文化財調査報告書第13集 米沢市教育委員会
- 手塚 孝・菊地政信 (1985)『米沢市万世町桑山団地造成地内埋蔵文化財調査報告書第Ⅲ集』
米沢市埋蔵文化財調査報告書第17集 米沢市教育委員会
- 菊地政信・金子正廣 (1988)『矢子大日向』米沢市埋蔵文化財調査報告書第22集 米沢市教育委員会
- 山形県教育委員会 (1985~1987)『押出遺跡』現地説明会資料

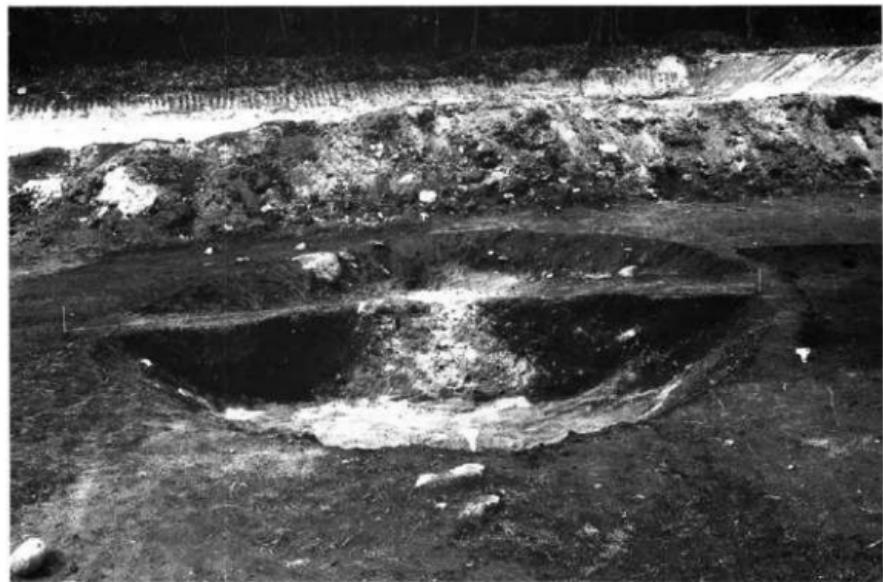
図 版



▲荒縄C遺跡遺構全景(東より西を望む)



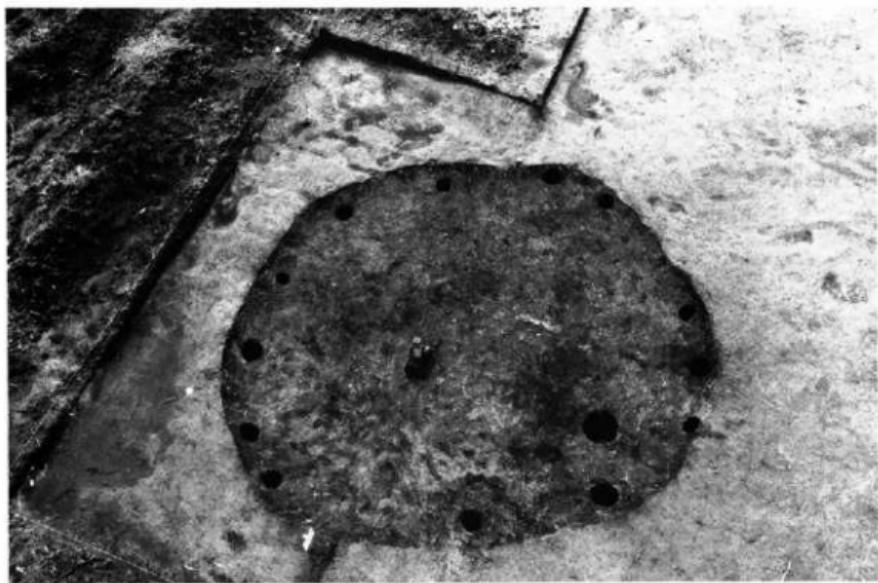
▲XY2・HY4・HY45全景(南東から北西を望む)



▲XY17セクション状況(南から北を望む)



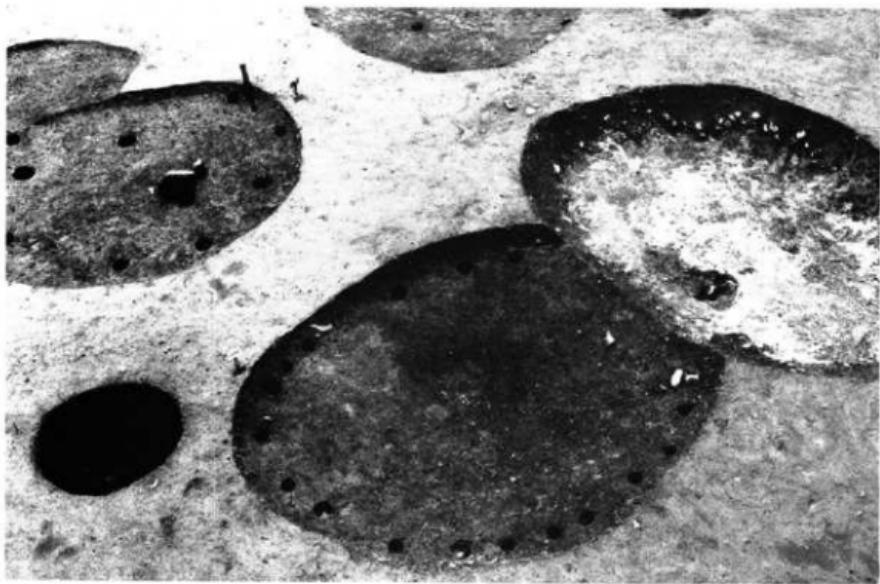
▲XY3セクション状況(南から北を望む)



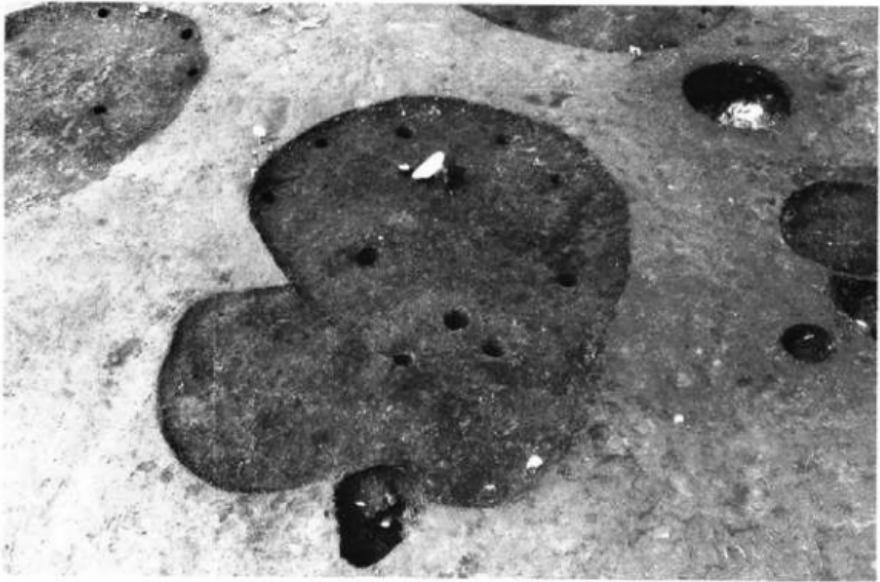
▲HY1発掘全景(東から西を望む)



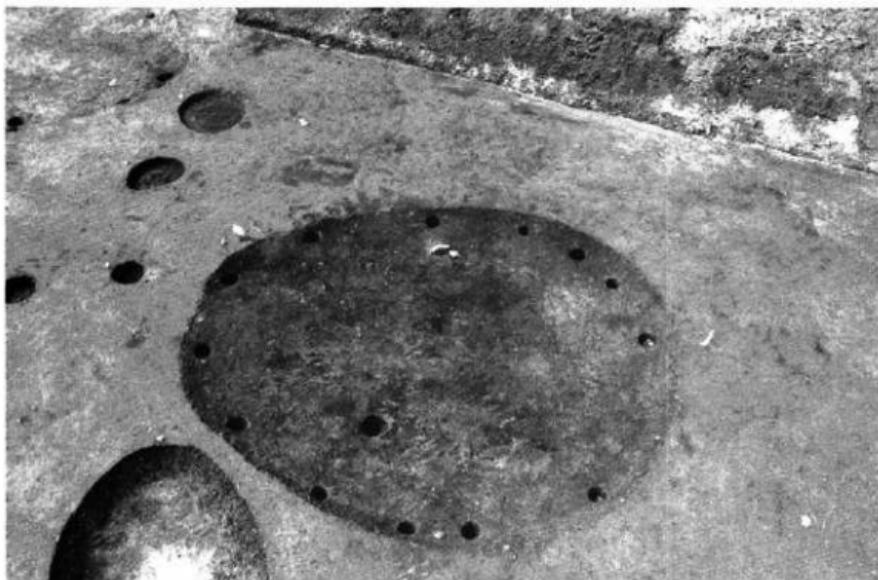
▲XY17・HY18・HY19発掘全景(東から西を望む)



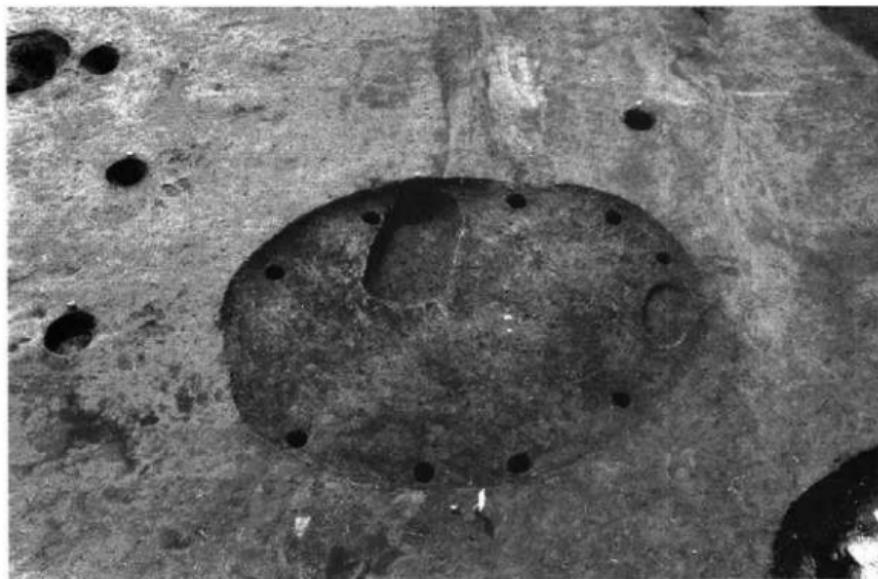
▲HY5 発掘全景(南東から北西を望む)



▲HY6 · FY22発掘全景(南から北を望む)

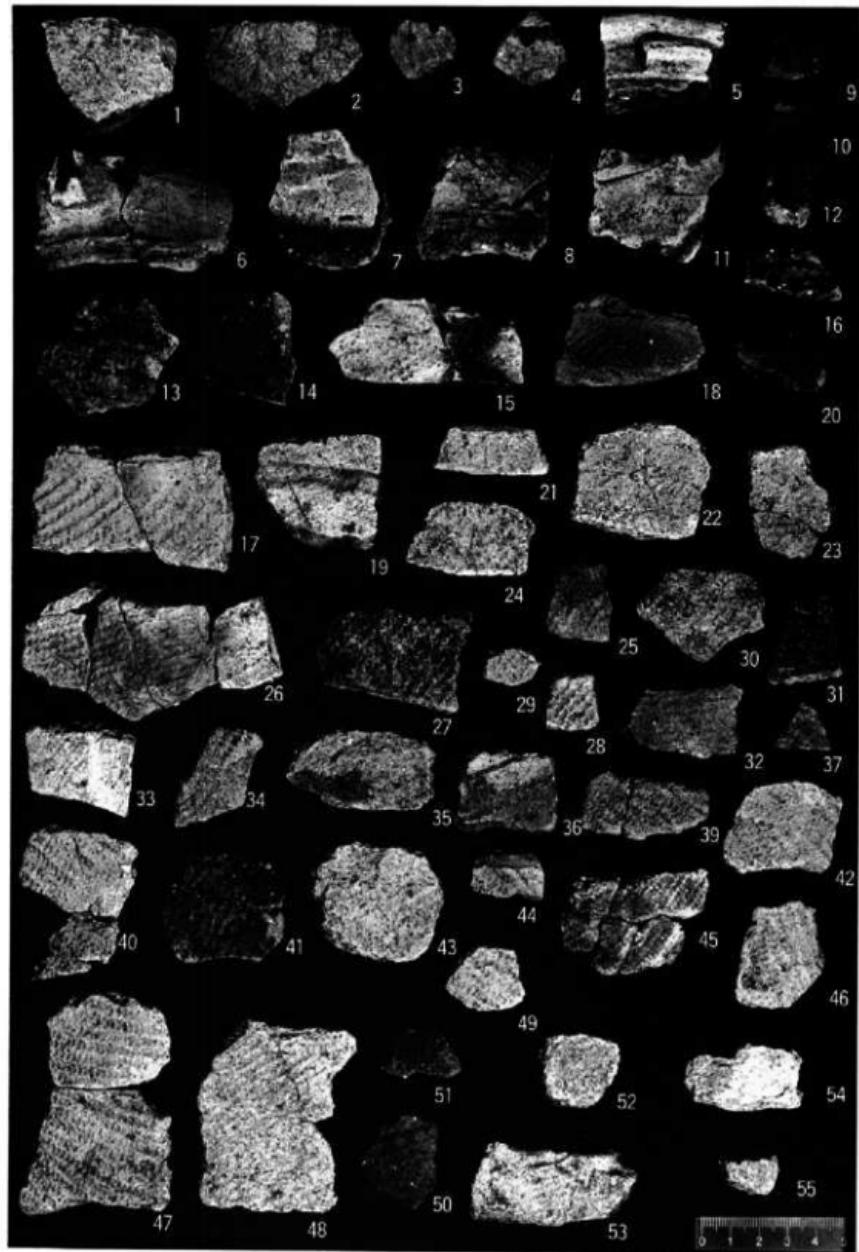


▲HY45発掘全景(南から北を望む)

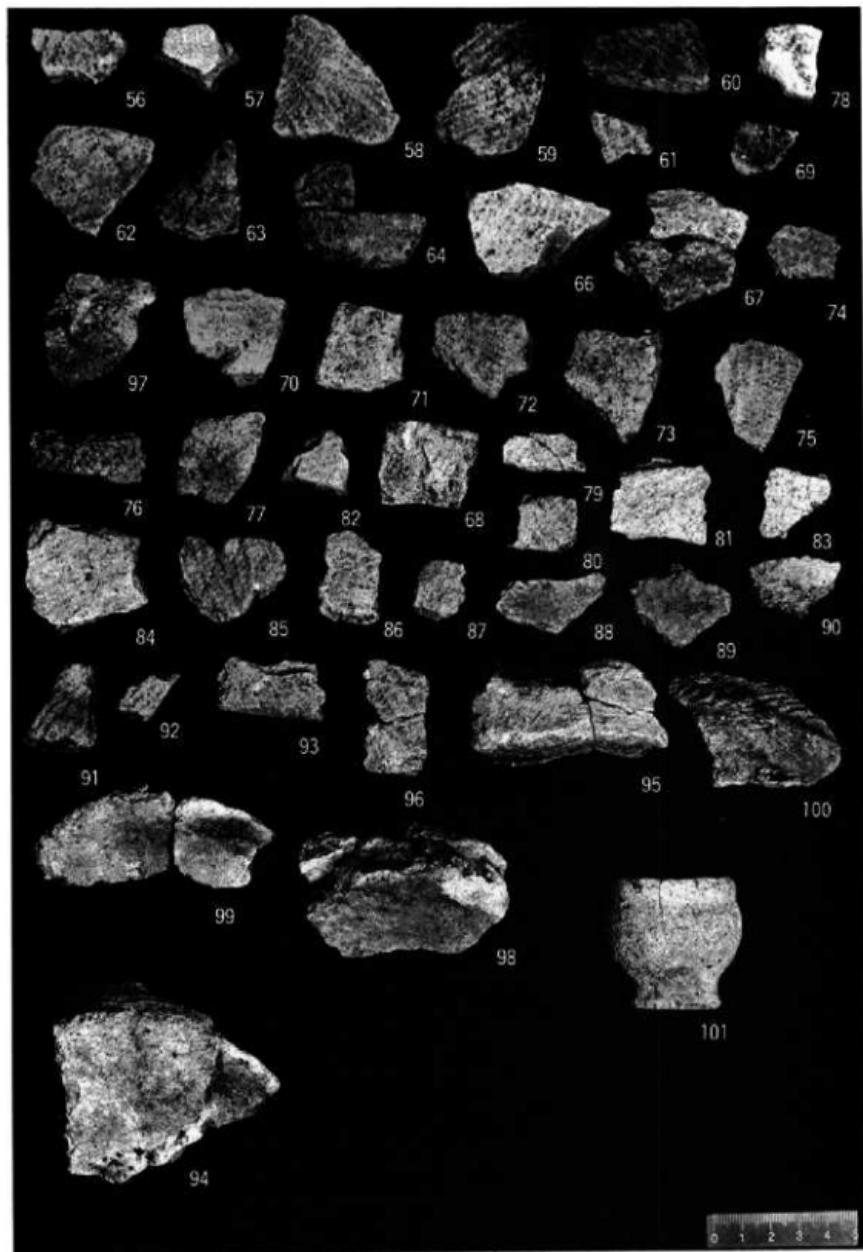


▲HY46発掘全景(東から西を望む)

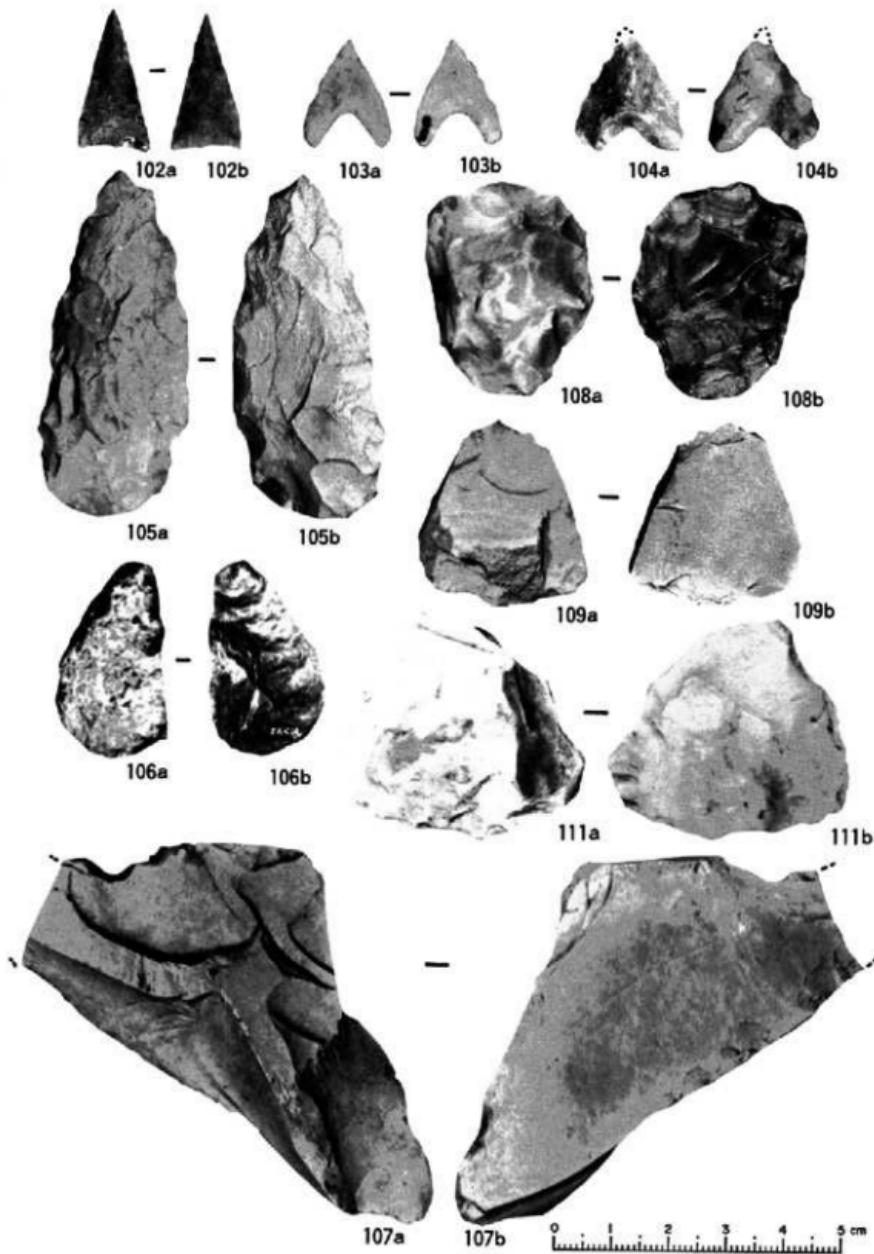
第六図版
笊篠C遺跡出土の土器(1)



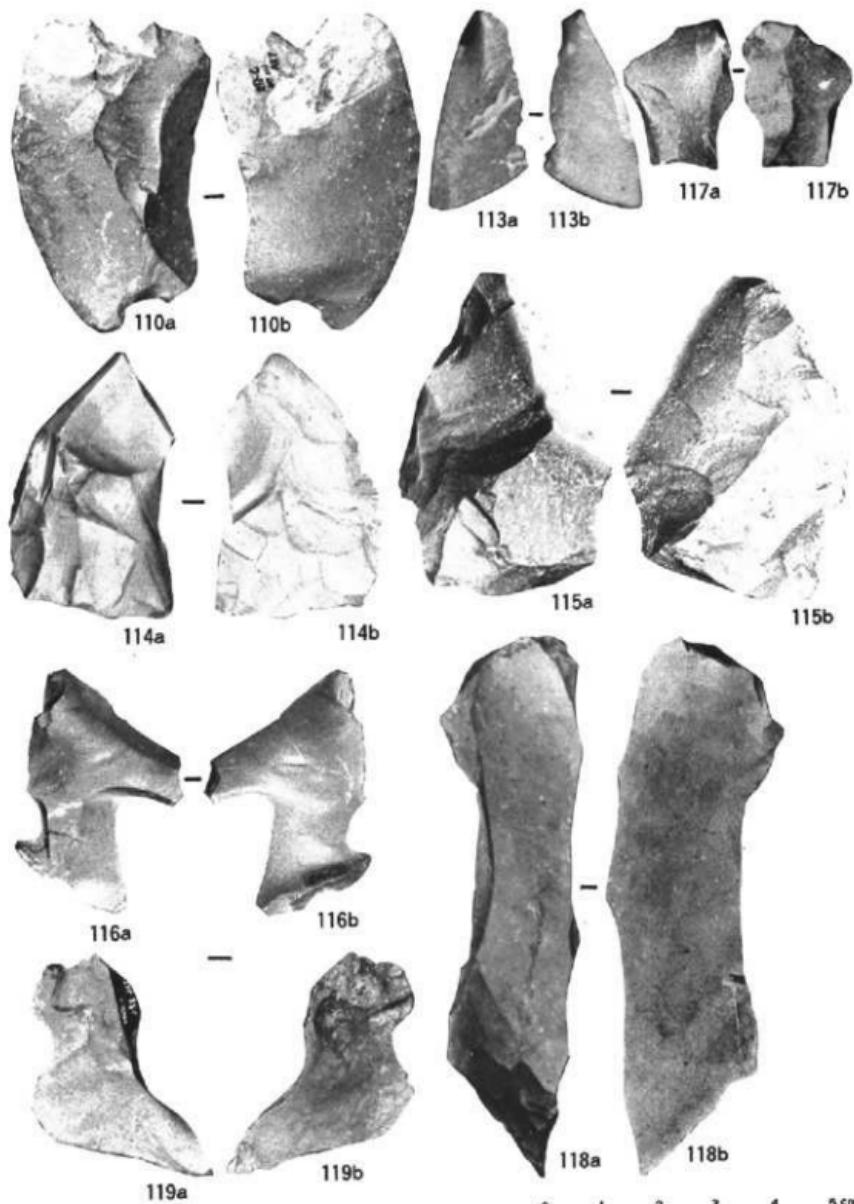
第七図版 犬塚C遺跡出土の土器(2)



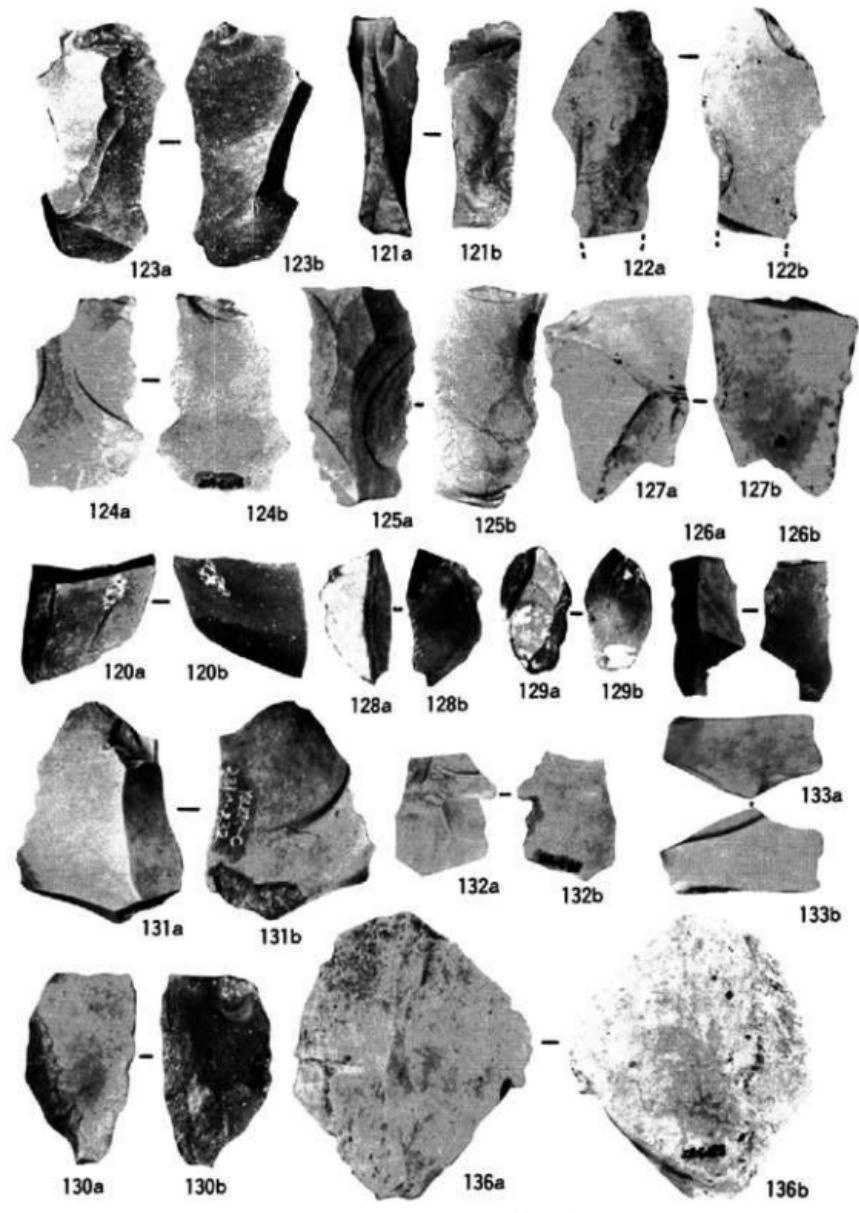
第八図版
荒縄C遺跡出土の石器(1)



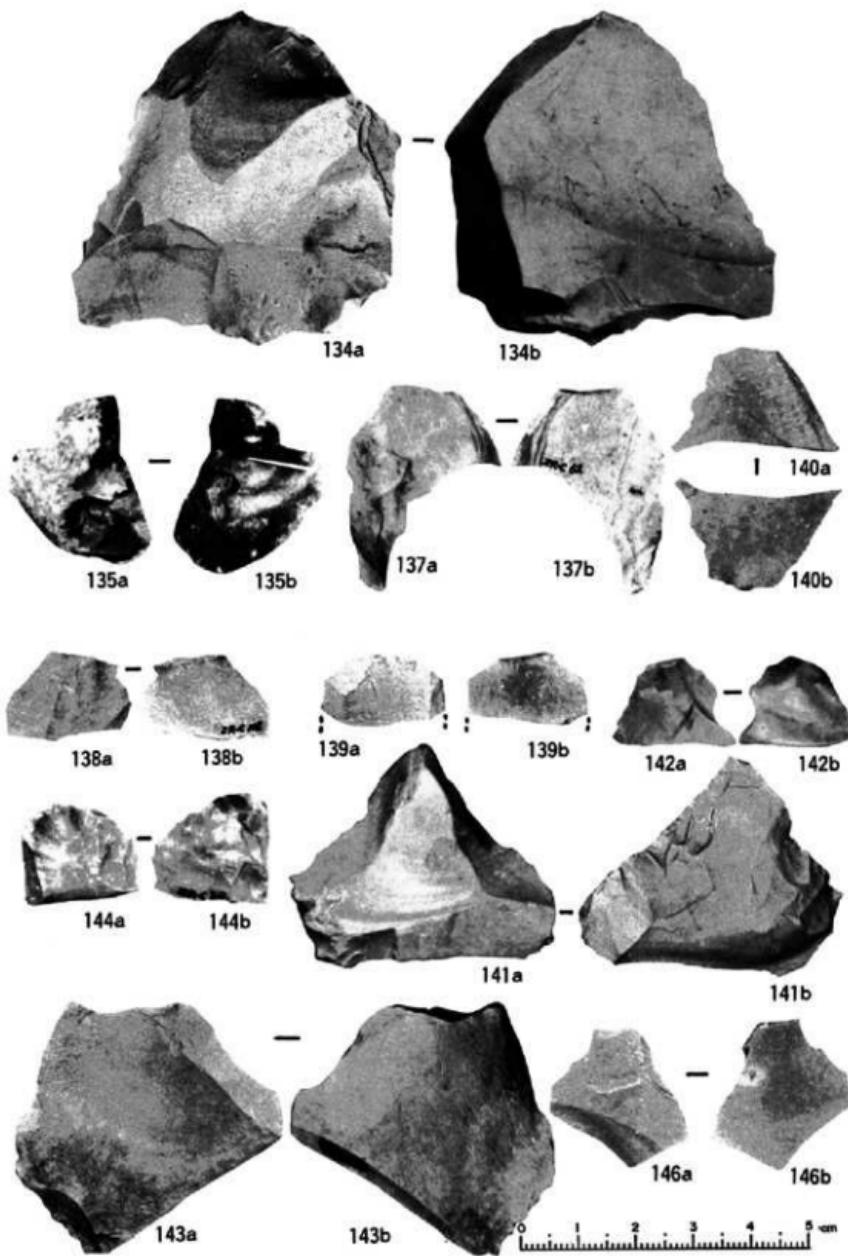
第九図版 犬飼C遺跡出土の石器(2)



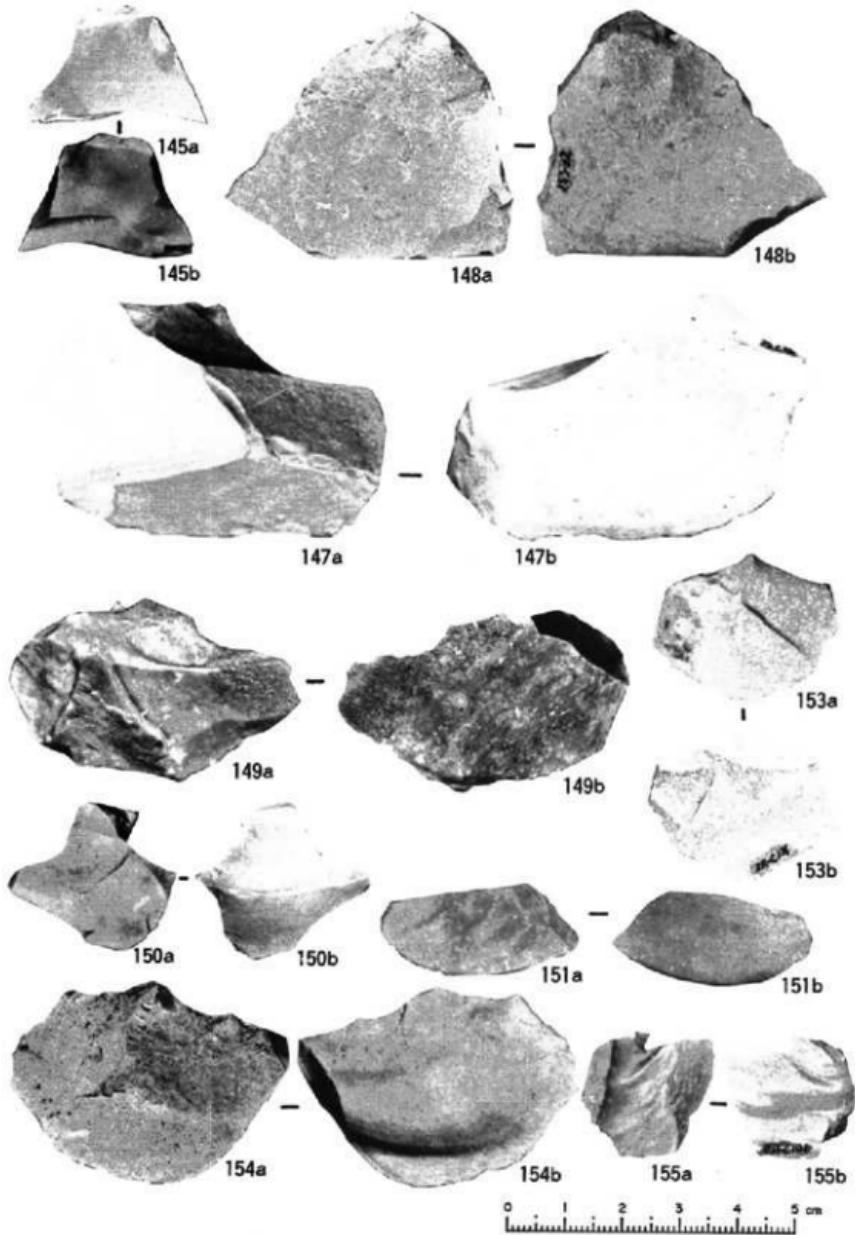
第十一図版
笊籠C遺跡出土の石器(3)



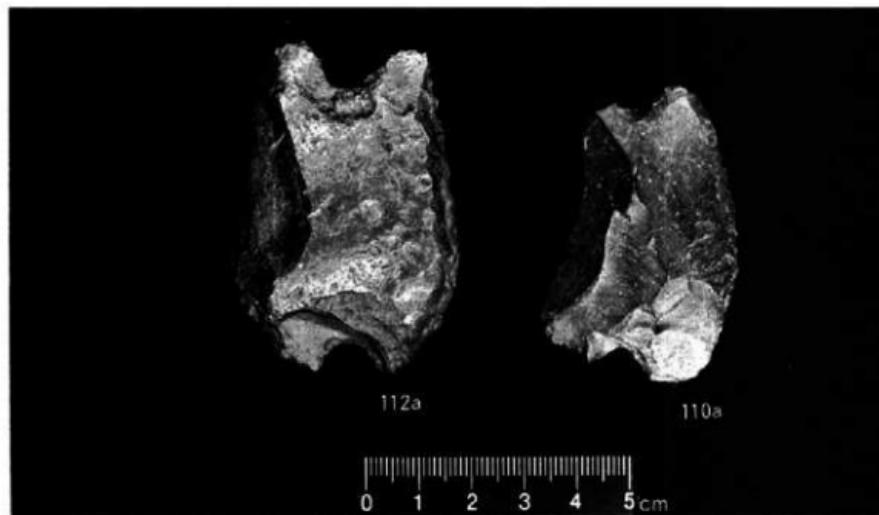
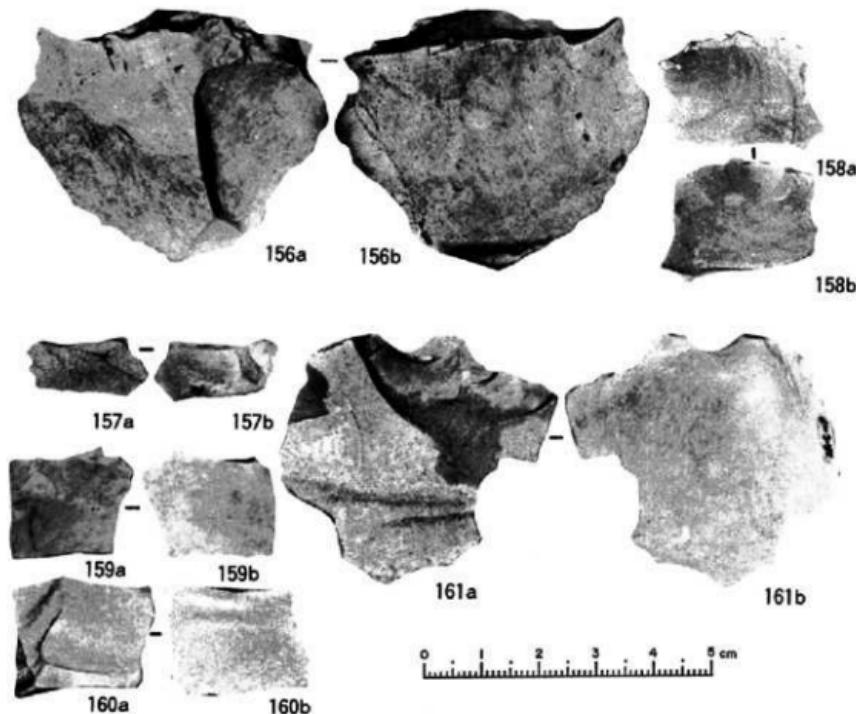
0 1 2 3 4 5 cm

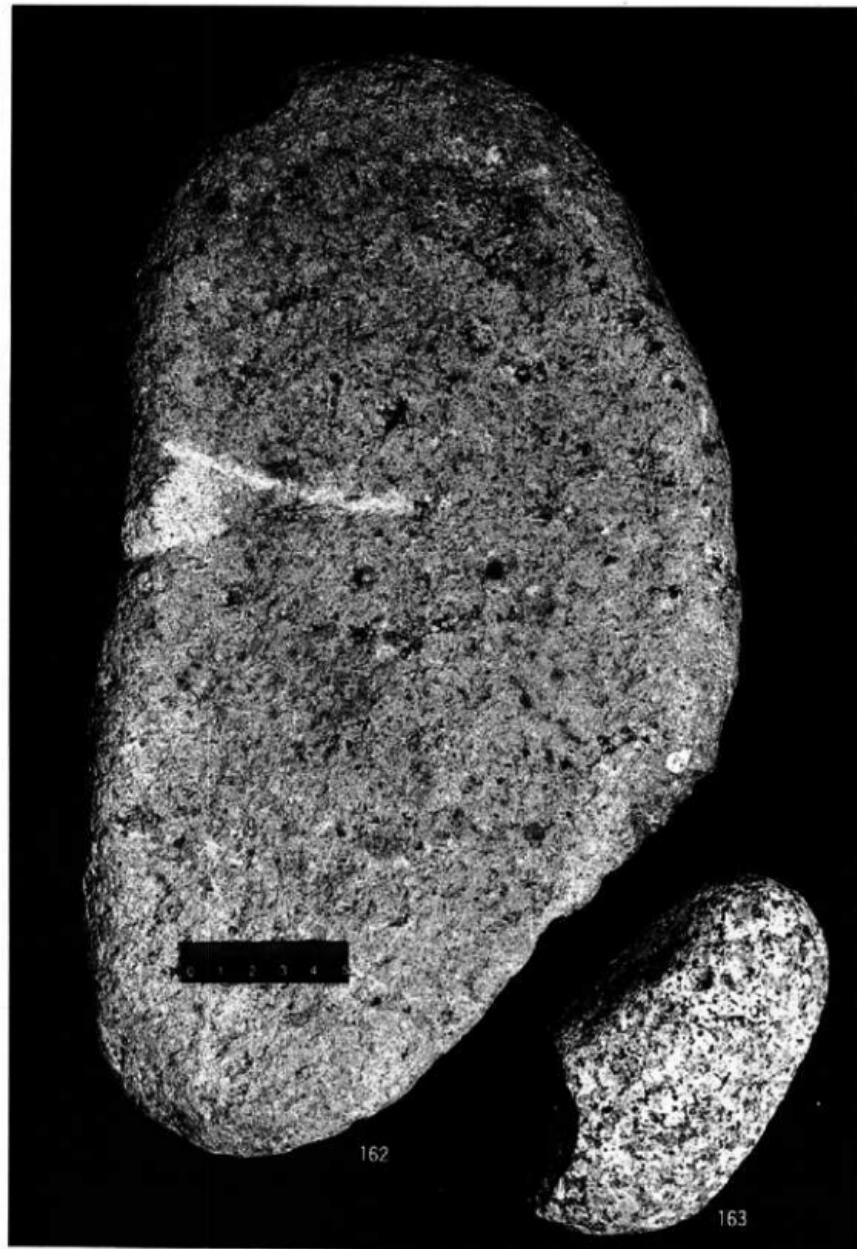


第十二図版
京葉C遺跡出土の石器(5)



0 1 2 3 4 5 cm





米沢市埋蔵文化財報告書第24集
笊籬C遺跡第I次発掘調査報告書

昭和63年6月20日 印刷

昭和63年6月30日 発行

発行 米沢市教育委員会
米沢市金池 5-2-25
TEL (0238)21-6111

印刷 緑よねざわ印刷
米沢市城西 2-3-72
TEL (0238)21-1212